

四四

撰時抄 せんじしやう

建治元年 がんにねん

五十四歳御作

256P

釈子 にちれん 日蓮述ぶ

そ ぶつぼう

夫れ仏法を学せん法は必ず先づ時をならうべし、過去かこの大通だいとう

ちしようぶつ しゅつせ

たま

智勝ちしょう仏は出世しゅつせし給たまいて十小劫じっしょうが間と・一經いつきやうも説たまき給たまはず經いに云いく

いちざじゅうしやうこう

一坐いちざ十小劫じっしょう又また云いく、仏・時ときの未いまだ至いたらざるをし知しり請しょうを受けて默然もくねん

として坐ます」等うんぬん云云、今の教主きやうしゅ釈尊しやくそんは四十余年よんじゆうよねんの程法華經ほけきやうを

と たま

説たまき給たまはず經いに云いく、「説いく時未いまだ至いたらざるが故ゆゑ」と云云うんぬん、老子らうしは

母ははの胎しよに処しよして八十年はちじゆ、弥勒菩薩みろくぼさつは兜率とそつの内院ないえんに籠こもらせ給たまいて五

十六億七千万歳せんまんをまち給たまうべし、彼かの時ほととぎす鳥にわとりは春はるををくり鶏鳥にわとりは

あかつき ちくしやう

曉あかつきをまつ畜生ちくしやうすらなをかくのごとし何いかに況いや仏法ぶつぼうを修行しゆぎやうせん

に時ときを糾ただざるべしや、寂滅じやくめつ道場どうじやうの砌みぎりには十方じつぱうの諸仏しよぶつ示現しげんし一切いっさい

の大菩薩集會し給い梵帝・四天は衣をひるがへし竜神・八部は
たなこころ ぼさつしゅうえ たま ぼんたい してん はちぶ

掌を合せ・凡夫・大根性の者は耳をそばだて生身得忍の諸
ぼさつ げだつがつ しょう しま こんじょう しょうしんとくにん しょ

菩薩・解脱月等請をなし給いしかども世尊は二乗作仏・久遠
じつじょう みょうじ せそん にじょうさぶつ くおん

実成をば名字をかくし即身成仏・一念三千の肝心、其義を宣べ
みょうじ そくしんじょうぶつ いちねんさんぜん かんじん そのぎ のべ

給はず、此等は偏にこれ機は有りしかども時の来らざればのべさ
たま これら ひとえ き

せ給はず經に云く「説く時未だ至らざる故」等云云、靈山會上
たま いわ いく とき いた いた ぶんぬん りょうぜん えじょう

の砌には閻浮第一の不孝の人たりし阿闍世大王座につらなり、
みぎり えんぶだいいち ぶこう あじゃ せだいおう りゅうにょ

一代謗法の提婆達多には天王如来と名をさづけ五障の竜女は
いちだいほうぼう てんのうにょらい けつじょうじょう じょうぶつ いるたね

蛇身をあらためずして仏になる、決定性の成仏は焦種の花さ
じゃしん けつじょうじょう じょうぶつ いるたね

き果なり久遠実成は百歳の叟・二十五の子となれるかとうたが
み くおんじつじょう おきな じゅうご じゅうご

ふ、一念三千は九界即仏界・仏界即九界と談ず、されば此の經の
いちねんさんぜん そくぶつ かい ぶつ かい そく だん

一字は如意宝珠なり（によいほうじゆ）一句は諸仏の種子となる此等（いっく　しよぶつ　しゆし　これら）は機の熟不熟は
さてをきぬ時の至れるゆへなり（いた）、經に云く（いわ）「今正しく（こ）是れ其の時（とき）
なり決定して大乘を説かん（けつじよう　だいじよう　と　うんぬん。）」等云云。

問うて云く（いわ　き）機にあらざるに大法を授けられれば愚人は定めて誹謗（ひぼう）
をなして惡道に墮るならば豈説く者の罪にあらずや、答えて云く（いわ　あくどう　おち　あに　つみ　つみ　い）
人路をつくる路に迷う者あり作る者の罪となるべしや良医・藥（ひとみち　みち　まよい　つみ　つみ　りようい　とが　りようい）
を病人にあたう病人嫌いて服せずして死せば良医の失となるか、
尋ねて云く（たず　いわ　ほけきよう　い）法華經の第二に云く（い）「無智の人の中に此の經を説くこ
と莫れ（なか）」同第四に云く（いわ　い）「分布して妄りに人に授与すべからず」同
第五に云く（いわ　い）「此の法華經は諸仏如来の秘密の蔵なり、諸經の中
に於て最も其の上に在り長夜に守護して妄りに宣説せざれ」等（おい　そ　あ　ちようや　しゆこ　みだ　せんぜつ　い）

云云、此等の經文は機にあらざれば説かざれというか、今反詰し
て云く不輕品に云く、「而も是の言を作さく我深く汝等を敬う等
云云 四衆の中に瞋恚を生じ心不淨なる者有り、惡口罵詈して
言く是の無智の比丘。又云く衆人・或は杖木瓦石を以て之を
打擲す」等云云、勸持品に云く「諸の無智の人の惡口罵詈等し
及び刀杖を加うる者有らん」等云云、此等の經文は惡口罵詈
乃至打擲すれどもとかれて候は説く人の失となりけるか、求
めて云く此の兩説は水火なり・いかなが心うべき答えて云く
天台云く「時に適うのみ」章安云く「取捨宜きを得て一向にす
べからず」等云云、釈の心は・或る時は謗じぬべきにはしばらく
とかず・或る時は謗ずとも強て説くべし・或る時は一機は信ずべ

くとも万機き謗ばうべくばとくべからず・或る時は万機き一同に謗ばうずとも
強しいて説しよくべし、初成道しよじやうどうの時は法慧ほうえ・功德林くどく・金剛幢こんかう・金剛藏こんかう・
文殊もんじゆ・普賢ふげん・弥勒みろく・解脱月等げだつがつの大菩薩ほさつ、梵帝ぼんたい・四天等してんの凡夫ぼんぶ・大
根性こんじやうの者かずをしらず、鹿野苑ろくやおんの苑そのには俱鄰等くりんの五人・迦葉等
の二百五十人・舍利弗等しやりほつの二百五十人・八万の諸天しよてん、方等大会ほうとうたいえの
儀式ぎしには世尊せそんの慈父じふの浄飯大王じやうばんだいおうねんごろに恋せさせ給たまいしかば
仏・宮に入らせ給たまいて觀仏三昧經かんぶつさんまいをとかせ給たまい、悲母ひもの御ために
利天りてんに九十日こもが間こも竈たまたらせ給たまいしには摩耶經まやをとかせ給たまう、慈父じふ
悲母ひもなどにはいかなる秘法ひほうか惜おしませ給たまうべきなれども法華經ほけきやうを
ば説たまかせ給たまはずせんずるところ機きにはよらず時いたらざれば・い
かにもとかせ給たまはぬにや。

問うて云くいかなる時にいわか小乗・権經をときいかなる時にしょうじょう けんきょう

か法華經を説くべきや、答えて云くほけきょう と いわ十信の菩薩より等覺のじっしん ぼさつ とうかく だいし大士に

いたるまで時と機とをば相知りがたき事なり何に況や我等はき じんぎ いか いわん われら

凡夫なり・いかでか時機をしるべき、求めて云くすこしも知る事ぼんぶ いわ じんぎ

あるべからざるか、答えて云くい わ ぶつげん仏眼をかつて時機をかんがへよ仏

・日を用て国土をてらせ、問うて云く其の心如何、答えて云くこくど いわ そ いかん いわ

大集經に大覺世尊・月蔵菩薩に対して未來の時を定め給えりだいしつきょう だいかくせそん ぼさつ みらい たま

所謂我が滅度の後の五百歳の中には解脱堅固・次の五百年にはい わ ゆる めつど このごひやくさい げだつけんこ

禪定堅固一千年・次の五百年には読誦多聞堅固・次の五百年にはぜんじょうけん こじょう ぶくじゅたぶんけんこ

は多造塔寺堅固二千年・次の五百年には我法の中に於て鬪諍たぞうとうじけん こじょう わがほう おい とうじょう

言訟して白法隱沒せん等云云、此の五の五百歳・二千五百余年ごんしょう びやくほう うんぬん

ひとびと ひょうけん に人人の料簡さまざまなり、漢土の道 かんど どうしゆくぜん 綽禅师が云く正像二千

・四箇の五百歳には小乗 しょうじょう と大乘 だいじょう との白法盛なるべし末法に入

つては彼等の白法皆消滅して浄土の法門 じょうど ほうもん ・念仏の白法を修行 ねんぶつ びやくほう しゆぎよう

せん人計り生死をはなるべし、日本国の法然が料簡して云く今 ばか しょうじ にほんこく ほうねん りょうけん いわ

・日本国に流布する法華經・華嚴經並びに大日經諸の小乗經 にほんこく る ぶ ほけきよう けこんきようなら だいにちきようもるもるしょうじようきよう

・天台・真言・律等の諸宗は大集經の記文の正像二千年の てんだい しんごん まつぼう しょうじゆう だいしつきよう きもん しょうぞう

白法なり末法に入つては彼等の白法は皆滅尽すべし設い行ずる びやくほう まつぼう かわら びやくほう みなめつじん たとい

人ありとも一人も生死をはなるべからず、十住毘婆沙論と曇鸞 しょうじ ひとりじん しゅうじ びしゃもんろん どんらん

法師の難行道道綽の未有一人得者・善導の千中無一これなり、 ほつし なんぎふじつじつじゆく みういちにんとくしゃ ぜんどう せんちゅうむいつ

彼等の白法隱没の次には浄土三部經・弥陀・称名の一行ばか かわら びやくほうおんもつ じょうどさんぶきよう みだ しょうみよう

り大白法として出現すべし、此を行ぜん人人はいかなる悪人 びやくほう しゅつげん ひとびと あくにん

ぐにん

じゅつそくじゅつしょう

ひやくそくひやくしょうただじょうど

いちもん

愚人なりとも十即十生・百即百生唯浄土の一門のみ有つて

路に通入すべしとはこれなり、されば後世を願はん人人は叡山・

とうじ

おんじょう

ななだいじ

にほん

しょう

しょうざん

ごきえ

東寺・園城・七大寺等の日本一州の諸寺・諸山の御帰依をとど

めて彼の寺山によせをける田畠郡郷をうばいとつて念仏堂につけ

けつじょうおうじょう

なむあみだぶつ

あした

そ

ば決定往生南無阿弥陀仏とすすめければ我が朝一同に其の義

になりて今に五十余年なり、日蓮此等の悪義を難じやぶる事はこ

だいしつきょう

びやくほうおんもつ

あくぎ

なん

とうせ

とふり候いぬ、彼の大集経の白法隠没の時は第五の五百歳当世

うたがい

ただ

びやくほうおんもつ

ほけきょう

かんじん

なる事は疑ひなし、但し彼の白法隠没の次には法華経の肝心

なむみょうほうれんげきょう

びやくほう

えんぶだい

はちまん

そ

たる南無妙法蓮華経の大白法の一閻浮提の内八万の国あり其の

はちまん

しんかなら

ばんみん

にほんこく

国に八万の王あり王王ごとに臣下並びに万民までも今・日本国

みだしょうみょう

ししゅう

とな

こうせんるふ

たま

に弥陀称名を四衆の口口に唱うるがごとく広宣流布せさせ給う

べきなり。

問うて云く其の証文如何、答えて云く法華經の第七に云く「我

めつど

このごひやくさい

こうせんるふ

えんぶだい

おい だんぜつ

が滅度の後・後の五百歳の中に広宣流布して閻浮提に於て断絶せ

しむること無けん」等云云、經文は大集經の白法隱没の次の

たま

こうせんるふ

うんぬん

きようもん だいしっきよう

びやくほうおんもつ

あくせまつほう

時をとかせ給うに広宣流布と云云、同第六の卷に云く「惡世末法

よこ

うんぬん

いわ

後の末世の

の時能く是の經を持つ者」等云云又第五の卷に云く「

ほうめつ

いわ

しか

い

の

法滅せんとする時」等又第四の卷に云く「而も此經は如来現在に

なのおんしつ

い

めつど

い

い

い

い

い

すら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」又第五の卷に云く「一切

せけんあだおお

がた

とうじようけんこ

世間怨多くして信じ難し」又第七の卷に第五の五百歳・鬪諍堅固

の時を説いて云く「惡魔・魔民諸の天竜・夜叉・鳩槃荼等其の

便を得ん」大集經に云く「我が法の中に於て鬪諍言訟せん」

たより

だいしっきよう

い

い

おい

とうじようけんし

い

等云云、法華經の第五に云く「悪世の中の比丘」又云く「或は

あれんにや

阿蘭若に有り」等云云又云く「悪鬼其身に入る」等云云、文の心

は第五の五百歳の時悪鬼の身に入る大僧等・国中に充滿せん

そのとき

ちじん

しゅつげん

あつき

おうしんばんみん

其時に智人・一人出現せん彼の悪鬼の入る大僧等時の王臣万民

かたらい

あつく

めり

じょうもくがりやく

るざい

しざい

しゃか

等を語て悪口罵詈・杖木瓦礫・流罪・死罪に行はん時釈迦・

たほう

じっぽう

しょうぶつ

じゆ

ぼさつ

おお

ぼさつ

ぼんたい

多宝・十方の諸仏・地涌の大菩薩らに仰せつけ大菩薩は梵帝・

にちがつ

してん

もう

そのとき

てんべんちよう

こくしゆ

日月・四天等に申しくだされ其の時・天変地天盛なるべし、国主

そ

等其のいさめを用いずば鄰国にをほせつけて彼彼の国国の悪王・

あくびく

ぜんだいみもん

とつじよう

えんぶだい

おこ

悪比丘等をせめらるるならば前代未聞の大鬪諍一閻浮提に起る

そのとき

にちがつししよう

してんげ

いつさいしゅじよう

ある

べし其の時・日月所照の四天下の一切衆生・或は国を・をし

ある

み・或は身を・をしむゆへに一切の仏・菩薩にいのりをかくとも

しるしなくば彼のにくみつる一の小僧を信じて無量の大僧等八万はちまん

だいおう

いっさい

ばんみんみなこうべ

たなごころ

の大王等、一切の万民皆頭を地につけ掌を合せて一同に南無

みょうほうれんげきょう

じんりきぼん

じんりき

じっぽうせかい

妙法蓮華經となうべし、例せば神力品の十神力の時・十方世界

いっさいしゅじょう

しゃばせかい

おんじょう

の一切衆生一人もなく娑婆世界に向つて大音声をはなちて南無

しゃかむにぶつ

なむしゃかむにぶつ

なむみょうほうれんげきょう

なむ

釈迦牟尼仏・南無釈迦牟尼仏・南無妙法蓮華經・南無

みょうほうれんげきょう

妙法蓮華經と一同にさけびしがごとし。

いわ

きょうもん

ふんみょう

てんだい

みょうらく

でんぎょう

みらいき

問うて曰く經文は分明に候・天台・妙樂・伝教等の未来記

の言はありや、答えて曰く汝が不審逆なり釈を引かん時こそ

い

なんじ

ふしんさかしま

なり

きょうろん

ふしん

きょうもん

ふんみょう

たず

經論はいかにとは不審せられたれ經文に分明ならば釈を尋ぬ

い

そ

う

べからず、さて釈の文が經に相違せば經をすてて釈につくべきか

い

わ

どうりしよく

ぼんぶ

な

ら

如何、彼云く道理至極せり、しかれども凡夫の習・經は遠し釈

は近し近き釈・分明ふんみょうならばいますこし信心しんじんをますべし、今云いく

なんじ ぶんしん

汝なんじが不審ふしんねんごろなれば少少釈をいだすべし天台大師云てんだいだいしく

「このごひやくさい 後の五百歳遠く妙道みょうどうに沾うるわん」妙樂大師云みょうらくだいしく「末法の初め冥利みょうり

無きにあらず」伝教大師云でんぎょうだいしく「正像稍過ぎ已つて末法太だ近き

に有り法華一乗ほっけいちじょうの機き今正まさしく是れ其そのの時ときなり、何を以もつて知るこ

とを得る、安樂行品あんらくぎょうぼんに云く末世法滅まつせほつめつの時ときなり」又云いく「代を語ことば

れば則すなわち像の終り末の初め地を尋ぬれば唐たうの東かつ・羯かつの西・人を

原たずぬれば五濁ごじよくの生な・鬪諍とうじやうの時ときなり、經いに云く猶多怨嫉ゆたおんしつ・況滅度いわん

後まことと此の言良まことに以有えるなり」云云うんぬん、夫それ釈尊しゃくそんの出世しゅつせは住劫第九

の滅・人壽百歳の時にんじゆうなり百歳と十歳との中間ちゆうげんざいせ在世五十年滅後二

千年と一万年まんねんとなり、其その中間ちゆうげんに法華經ほけきの流布るふの時・二度ある

べし所謂在世の八年・滅後には末法の始の五百年なり、而に天台しかるにてんだい

いわゆるざいせい
みょうらく でんぎよう

・妙樂・伝教等は進んでは在世法華經の時にも・もれさせ給いたま

しりぞ めつごまつぼう

ぬ、退いては滅後末法の時にも生れさせ給はず中間なる事をな

たま まつぼう

げかせ給いて末法の始をこひさせ給う御筆なり、例せば阿私陀

せんじん しつたたいし

仙人が悉達太子の生れさせ給いしを見て悲んで云く現生には九十

いわ げんせい

にあまれり・太子の成道を見るべからず後生には無色界に生れ

せつぼう

て五十年の説法の坐にもつらなるべからず正像末にも生るべか

しょうぞうまつ

らずとなげきしがごとし、道心あらん人人は此を見きて悦ばせ

どうしん ひとびと

給え正像一千年の大王よりも後世を・をもはん人人は末法の今

ひとびと まつぼう

の民にてこそあるべけれ此を信ぜざらんや、彼の天台の座主より

な む みょうほうれんげきよう とな

も南無妙法蓮華經と唱うる癡人とはなるべし、梁の武帝の願に

云く「寧ろ提婆達多となて無間地獄には沈むとも鬱頭羅弗とはならじ」と云云。

問うて云く竜樹・天親等の論師の中に此の義ありや、答えて云く竜樹・天親等は内心には存ぜさせ給うといえども言には此の義を宣べ給はず、求めて云くいかなる故にか宣給ざるや、答えて云く多くの故あり一には彼の時にも機なし二には時なし三には迹化なれば付嘱せられ給はず、求めて云く願くは此の事よくよくきかんとをもう、答えて云く夫仏の滅後二月十六日よりは正法の始なり迦葉尊者・仏の付嘱をうけて二十年、次に阿難尊者二十年・次に商那和修二十年・次に優婆崛多二十年・次に提多迦二十年、已上一百年が間は但小乘經の法門をのみ弘通して諸

だいじょうきよう みようじ

大乘經は名字もなし何に況や法華經をひろむべしや、次には

みしゃか ぶつだなんだい

ぶつだ

きようきびく ふなしや

弥遮迦・仏陀難提・仏駄密多・脇比丘・富那奢等の四五人、前の

だいじょうきよう ほうもん

しゅつたい

五百余年が間は大乗經の法門少少出来せしかどもとりたてて

ぐつう

たま

しょうじょうきよう

おもて

だいしつきよう

弘通し給はず、但小乗經を面としてやみぬ、已上大集經の先

げだつけんご

しょうほう

いご

そ

五百年解脱堅固の時なり、正法の後六百年已後一千年が前其の

ちゅうげん

めみょうぼさつ

びらそんじや

りゅうじゅぼさつ

だいばぼさつ

らこそんじや

中間に馬鳴菩薩・毘羅尊者・竜樹菩薩・提婆菩薩・羅・尊者・

そうぎや なんだい

そうぎや やしや

く まらだ

しゃやな

ばんだ

まぬら

かくろく

僧・難提・僧伽耶奢・鳩摩羅駄・闍夜那・盤陀・摩奴羅・鶴勒

やな

しし

ひとびと

げどう

夜那・師子等の十余人の人人始には外道の家に入り次には

しょうじょうきよう

しょうだいじょうきよう

しょうじょうきよう

小乗經をきわめ後には諸大乘經をもて諸小乗經をさんざ

は

うしないたま

これら

しょうだいじょうきよう

しょう

んに破し失ひ給いき此等の大士等は諸大乘經をもつて諸

しょうじょうきよう

しょうだいじょうきよう

ほけきよう

しょうれつ

小乗經をば破せさせ給いしかども諸大乘經と法華經の勝劣

ふんみょう

をば分明にかかせ給はず、たといしやうれつ設い勝劣をすこしかかせ給いたるや

うなれども本・迹の十妙・二乗作仏・久遠実成・已今当の妙・

ひやつかいせんによ

いちねんさんぜん

かんよう

ほうもん

ふんみょう

ある

百界千如・一念三千の肝要の法門は分明ならず、但・或は指を

もつて月をさすがごとくし・或は文にあたりてひとはし計りかか

たま

けどう

しじゅう

してい

おんこん

とくどう

うむ

いちぶん

い

ち

ぶん

い

ち

ぶん

い

ち

せ給いて化導の始終・師弟の遠近・得道の有無はすべて一分もみ

これら

しやうほう

だいしっきやう

ぜんじやうけんこ

あ

る

は

し

やう

ほう

だい

し

き

やう

けん

へず、此等は正法の後の五百年・大集經の禪定堅固の時にあ

しやうほう

が

つ

ぶ

つ

じ

ゅう

まん

あ

る

は

し

やう

ほう

たれり、正法一千年の後は月氏に仏法充滿せしかども・或は小

は

ある

ごんきやう

じ

き

やう

おん

も

つ

ぶ

つ

ほう

さ

ま

をもて大を破し・或は権經をもつて実經を隱没し仏法さまざま

みだ

とくどう

ぶ

つ

ほう

あ

く

どう

お

ち

は

し

やう

ほう

さ

ま

に乱れしかば得道の人やふやくすくなく仏法につけて悪道に墮る

みだ

とくどう

ぶ

つ

ほう

あ

く

どう

お

ち

は

し

やう

ほう

さ

ま

者かずをしらず、正法一千年の後・像法に入つて一十五年と申

ぶ

つ

ほう

し

やう

ほう

あ

く

どう

お

ち

は

し

やう

ほう

さ

せしに仏法東に流れて漢土に入りనికి、像法の前五百年の内・始

ぶ

つ

ほう

し

やう

ほう

あ

く

どう

お

ち

は

し

やう

ほう

さ

の一百余年が間は漢土の道士と月氏の仏法と諍論していまだ事

さだまらず設たとい定まりたりしかども仏法を信ずる人の心いまだふ

かからず、而しかるに仏法の中に大小・權実・顯密をわかつならば

聖教一同ならざる故・疑うたがいをこりてかへりて外典とともなう者

もありぬべし、これらのをそれあるかのゆへに摩騰・竺蘭は自は

知しかつて而も大小を分けず權実をいはずしてやみぬ、其その後・魏

・晉・齊・宋・梁の五代が間・仏法の内に大小・權実・顯密を

あらそひし程にいづれこそ道理ともきこえずして上み一人より下

も万民にいたるまで不審ふしんすくなからず南三・北七と申して仏法十

流にわかれぬ所謂南には三時・四時・五時・北には五時・半滿・

四宗・五宗・六宗、二宗の大乗一音等・各各義を立て辺執水火

なり、しかれども大綱たいこうは一同なり所謂いわゆる一代いちだい聖教しょうきょうの中には華嚴經けこんぎょう

第一・涅槃經第二・法華經第三なり法華經は阿含あこん・般若はんにゃ・淨名じょうみょう

・思益等の經經しやくきょうに對すれば眞實しんじつなり了義經りょうぎきょう・正見せいけんなりしかり

といへども涅槃經ねはんぎょうに對すれば無常教むじょう・不了義經ふりょうぎきょう・邪見じゃけんの經等

云云、漢より四百余年の末へ五百年に入つて陳隋ちんずい二代に智ちと

申す小僧一人あり後には天台智者大師てんだいちしやだいしと号したてまつる、南北の

邪義をやぶりて一代いちだい聖教しょうきょうの中には法華經第一・涅槃經第二・

華嚴經第三なり等云云、此れ像法ぞうぼうの前・五百歳・大集經だいしつきやうの

讀誦多聞堅固どくじゅたぶんけんこの時にあひあたれり、像法ぞうぼうの後・五百歳は唐とうの始・

太宗たいそう皇帝ぎやうの御宇げんじやうさんぞうに玄奘がっし三藏さんざう・月支がっしに入つて十九年が間、百三十

箇国じとうの寺塔けんもんを見聞けんもんして多くの論師ろんしに値あいたてまつりて八万はちまん聖教しょうきょう

・十二部經の淵底を習いきわめしに其の中に二宗あり所謂いわゆる

ほうそうしゅう さんろんしゅう

法相宗・三論宗なり、此の二宗の中に法相・大乘は遠くは弥勒みろく

むちやく

かいけんろんし

かんど

たいそうこうてい

・無著近くは戒賢論師に伝えて漢土にかへりて太宗皇帝にさづけ

させ給う、此の宗の心は仏教は機に随うべし一乗の機のために

たま

さんじょうほうべん

いちじょうしんじつ

いわずるほけきょう

さんじょう

き

は三乗方便・一乗眞実なり所謂法華經等なり、三乗の機のた

さんじょうしんじつ

いちじょうほうべんいわゆるじんみつ

しやうまん

こ

めには三乗眞実・一乗方便所謂深密經・勝鬘經等此れなり、

てんだいちしや

むね わきま

うんぬん

しか

たいそう

けんおう

とうじ

天台智者等は此の旨を弁えず等云云、而も太宗は賢王なり当時名

いってん

さんこう

すぐ

を一天にひびかすのみならず三皇にもこえ五帝にも勝れたるよし

しかい

かんど

四海にひびき漢土を手ににぎるのみならず高昌・高麗等の一千八

しがい

ないげ

きわ

けんおう

だいいち

百余国をなびかし内外を極めたる王ときこへし賢王の第一の

ごきえ

てんだいしゅう

がくしや

かしら

御帰依の僧なり、天台宗の学者の中にも頭をさしいだす人・一

人もなし、而れば法華經の実義すでに一国に隱没しぬ、同じき太宗たいそう

の太子・高宗・高麗の継母・則天皇后の御宇に法蔵法師といふ者たいし こうそう こま けいぼ そくてんこうこう ぎょう ほうぞう ほんし

あり法相宗に天台宗のをそわるところを見て前に天台の御時ほうそうしゅう てんだいしゅう てんだい おんとき

せめられし華嚴經を取出して一代の中には華嚴第一・法華第二・けこんきょう いちだい けこんだいいち ほっけ

涅槃第三と立てけり、太宗・第四代玄宗皇帝の御宇開元四年同八ねはん せいてん いんど たいそう げんそうこうてい ぎょうかいげん

年に西天・印度より善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵大日經せいてん いんど ぜんむいさんぞう こんこうちさんぞう ふくうさんぞうだいにちきょう

・金剛頂經・蘇悉地經を持て渡り真言宗を立つ、此の宗の立義こんごうちょうきょう そしつちきょう たも わた しんごんしゅう りつぎ

に云く教に二種あり一には釈迦の顯教所謂華嚴・法華等、二にいわ しゃか けんきょういわゆるけこん ほっけ

は大日の密教所謂大日經等なり、法華經は顯教の第一なり此だいにち みつきょういわゆるだいにちきょう ほけきょう けんきょう だいいち

の經は大日の密教に對すれば極理は少し同じけれども事相のだいにち みつきょう ごくり じそう

印契と真言とはたえてみへず三密相應せざれば不了義經等云云、いんけい しんごん そうおう ふりょうぎきょう うんぬん

ほつそう

已上法相・華嚴・真言の三宗一同に天台法華宗をやぶれども

てんだいほつけしゅう

てんだいだいし

ちじん ほつけしゅう

天台大師程の智人・法華宗の中になかりけるかの間・内内はゆは

てんだい けつじょう

れなき由は存じけれども天台のごとく公場にして論ぜられざり

かみこくおう だいじん いっさい じんみん

ければ上国王・大臣・下一切の人民にいたるまで皆仏法に迷い

しゅじょう とくどう

て衆生の得道みなとどまりけり、此等は像法の後の五百年の前

ぞうほう これら ぞうほう

二百余年が内なり、像法に入つて四百余年と申しけるに百済国よ

いっさいきょうなら きょうしゅしやくそん

り一切経並びに教主釈尊の木像・僧尼等日本国にわたる、漢土

かんど

の梁の末・陳の始にあひあたる、日本には神武天王よりは第三十

にほん

きんめい きょう

代欽明天王の御宇なり、欽明の御子・用明の太子に上宮王子仏法

ぐつう たま なら ほけきょう じょうみきょう しょうまん

を弘通し給うのみならず並びに法華経・浄名経・勝鬘経を

ちんこく

鎮護国家の法と定めさせ給いぬ、其の後・人王第三十七代に孝徳

天王の御宇に三論宗・成実宗を觀勒僧正・百濟国よりわたす、

同御代に道昭法師・漢土より法相宗・俱舍宗をわたす、人王第

四十四代元正天王の御宇に天竺より大日經をわたして有りしか

ども而も弘通せずして漢土へかへる此の僧をば善無畏三藏とい

う、人王第四十五代に聖武天皇の御宇に審祥大德・新羅国より

華嚴宗をわたして良弁僧正・聖武天王にさづけたてまつりて

東大寺の大仏を立てさせ給えり同御代に大唐の鑒真和尚天台宗

と律宗をわたす、其の中に律宗をば弘通し小乗の戒場を

東大寺に建立せしかども法華宗の事をば名字をも申し出させ給

はずして入滅し了んぬ、其後人王第五十代像法八百年に相当つ

て桓武天王の御宇に最澄と申す小僧出来せり後には伝教大師

と号したてまつる、始には三論・法相・華嚴・俱舍・成実・律
ろくしゅうなら ぜんしゅう ぎょうひょうそうじょう ならい
の六宗並びに禅宗等を行表 僧正等に習学せさせ給いし程に
我と立て給える国昌寺・後には比叡山と号す、此にして六宗の
ほんきょう ほんろん にんし
本經・本論と宗宗の人師の釈とを引き合せて御らむありしかば
彼の宗宗の人師の釈・所依の經論に相違せる事多き上僻見多多
にして信受せん人皆惡道に堕ちぬべしとかんがへさせ給う其の上
ほけきょう じつぎ ひとびと お たま そ
法華經の実義は宗宗の人人・我も得たり我も得たりと自讃ありし
かども其の義なし、此れを申すならば喧嘩出来すべしもだして
もう ぶっせい しゅつたい
申さずば仏誓にそむきなんとをもひわづらはせ給いしかども終に
いましめ かんむこうてい たま
仏の誠ををそれて桓武皇帝に奏し給いしかば帝・此の事を・をど
ろかせ給いて六宗の碩学に召し合させ給う、彼の学者等始めは
ろくしゅう せきがく たま がくしや

慢幢山のごとし悪心・毒蛇のやうなりしかども終に王の前にし
てせめをとされて六宗・七寺一同に御弟子となりぬ、例せば漢土
の南北の諸師・陳殿にして天台大師にせめおとされて御弟子とな
りしがごとし、此れはこれ円定・円慧計りなり其の上天台大師の
いまだせめ給はざりし小乗の別受戒をせめをとし六宗の八
大徳に梵網經の大乗・別受戒をさづけ給うのみならず法華經の
円頓の別受戒を叡山に建立せしかば延暦円頓の別受戒は日本
第一たるのみならず仏の滅後・一千八百余年が間身毒尸那一
閻浮提にいまだなかりし靈山の大戒・日本国に始まる、されば
伝教大師は其の功を論ずれば竜樹・天親にもこえ天台・妙樂
にも勝れてをはします聖人なり、されば日本国の当世の東寺・

おんじよう　ななだいじ　しょこく　はつしゅう　じょうど　ぜんしゅう　りつしゅう　しよそう

園城・七大寺・諸国の八宗・浄土・禅宗・律宗等の諸僧等

だれびと　でんぎようだいし　誰人か伝教大師の円戒をそむくべき、かの漢土九国の諸僧等は

円定・円慧は天台の弟子ににたれども円頓一同の戒場は漢土にな

えんね　てんだい　でし　えんどん　かんど　しよそう

ければ戒にをいては弟子とならぬ者もありけん、この日本国は

でんぎようだいし　おんでし　げどう　あくにん　しか　にほんこく

伝教大師の御弟子にあらざる者は外道なり悪人なり、而れども

かんど　にほん　てんだいしゅう　しんこん　しょうれつ　だいししんちゅう　しやうぶ

漢土・日本の天台宗と真言の勝劣は大師心中には存知せさせ

たま　ろくしゅう　てんだいしゅう　こうじよう　しやうぶ　けるゆへにや、

伝教大師已後には東寺・七寺・園城の諸寺日本

一州一同に真言宗は天台宗に勝れたりと上一人より下万人にい

たるまでをばしめしをもえり、しかれば天台法華宗は伝教大師

の御時計りにぞありける此の伝教の御時は像法の末・大集経の

おんときばか　でんぎよう　おんとき　ぞうほう　だいしっきよう

おんときばか　でんぎよう　おんとき　ぞうほう　だいしっきよう

おんときばか　でんぎよう　おんとき　ぞうほう　だいしっきよう

おんときばか　でんぎよう　おんとき　ぞうほう　だいしっきよう

おんときばか　でんぎよう　おんとき　ぞうほう　だいしっきよう

おんときばか　でんぎよう　おんとき　ぞうほう　だいしっきよう

たぞうとうじけんこ

わがほう

とうじょうこんしょう

びやくほうおんもつ

多造塔寺堅固の時なり、いまだ於我法中・鬪諍言訟・白法隱没の時にはあたらず。

まっぼう

だいしっきよう

おがほうちゅう

とうじょうこんしょう

今末法に入つて二百余歳・大集経の於我法中・鬪諍言訟・

びやくほうおんもつ

ぶつこ

えんぶだい

白法隱没の時にあたれり仏語まことならば定んで一閻浮提に

とうじょうおこ

じせつ

かんど

鬪諍起るべき時節なり、伝え聞く漢土は三百六十箇国・二百六

もっこ

からく

十余州は・すでに蒙古国に打ちやぶられぬ華洛すでにやぶられて

きそう きんそう

だつたん

つい

徽宗・欽宗の両帝・北蕃にいけどりにせられて韃靼にして終にか

たま

きそう

こうそうこうてい

くれさせ給いぬ、徽宗の孫・高宗皇帝は長安をせめをとされて

いなか りんあんあんざいふ

たま

こま

田舎の臨安行在府に落ちさせ給いて今に数年が間京を見ず、高麗

しらぎくだら

しよくく

みなだいもうこく

こうてい

六百余国も新羅百済等の諸国等も皆大蒙古国の皇帝に・せめられ

にほんこく

いきつしまなら

とうじょうけんこ

ぶつこ

ぬ、今の日本国の壹岐对馬並びに九国のごとし鬪諍堅固の仏語

地に墮おちず、あたかもこれ大海たいかいのしをの時をたがへざるがごとし、

是これをもつて案ずるに大集經だいしつきようの白法隱没びやくほうおんもつの時に次いで法華經ほけきようの大

白法びやくほうの日本国並びに一閻浮提えんぶだいに広宣流布こうせんるふせん事も疑うたがいうべから

ざるか、彼の大集經だいしつきようは仏説ぶつせつの中の權大乘こんだいじようぞかし、生死しやうじをはなる

道みちには法華經ほけきようの結縁けちえんなき者のためには未顕真實みけんしんじつなれども六道ろくどう・

四生ししよう・三世さんぜの事を記し給たまいけるは寸分もたがはざりけるにや、

何いかに況いわんや法華經ほけきようは釈尊しゃくそん・要説ようとうせつ真實しんじつとなのらせ給たまい多宝たほう佛ぶつは

真實しんじつなりと御判ごはんをそへ十方じつぱうの諸佛しよぶつは広長舌こうちやうぜつを梵天ぼんてんにつけて誠諦じやうたい

と指さし示しし、釈尊しゃくそんは重ねて無虚妄こもつの舌を色究竟くきように付けさせ給たまい

て後ご・五百歳いつさいに一切いっさいの佛法ぶつぽうの滅めつせん時とき・上行菩薩じやうぎやうぼさつに妙法蓮華經みやうほうれんげきよう

の五字ごじをもたしめて謗法ぼうぽう一闡提いつせんたいの白癩病びやくらいの輩やからの良藥りやうやくとせんと

ぼんたい

にちがつ

してん

りゅうじん

おほ

きんげんこもう

梵帝・

日月・

四天・

竜神等に

仰せつけられし

金言虚妄なるべし

だいち

はんぷく

こうざん

たいらく

や、

大地は反覆すとも

高山は頽落すとも

春の後に夏は来らずとも

日は東へかへるとも月は地に落つるとも此の事は一定なるべし、

とつじょうけんこ

にほんこく

おうしん

なら

ばんみん

此の事一定ならば鬪諍堅固の時・

日本国の王臣と並びに

万民等

おんつかい

なむ

みょうほうれんげきよう

るふ

ある

ある

が仏の御使として南無妙法蓮華經を流布せんとするを・

或は

めり

ある

あつく

ある

ある

ちようちやく

でし

けんそく

ある

罵詈し・

或は悪口し・

或は流罪し・

或は打擲し

弟子眷属等を

種種の難にあわする

人一人いかでか

安穩にては候べき、これをば

ひとびと

あんのん

ある

ある

ある

ある

ある

愚癡の者は咒詛すとも

をもひぬべし、

法華經をひろむる者は

日本国

にほんこく

いっさいしゅじょう

ふぼ

しょうあんだいし

いわ

彼が為に

悪を除くは即ち

すなわ

すなわ

すなわ

一切衆生の父母なり

章安大師云く「

彼が為に

悪を除くは即ち

すなわ

すなわ

すなわ

すなわ

すなわ

すなわ

是れ彼が親なり」等云云、

されば

日蓮は

当帝の

父母・

念佛者・

禅

衆・

真言師等が

師範なり又主君なり、

而るを

上一人より

下万民に

衆・

真言師等が

師範なり又主君なり、

而るを

上一人より

下万民に

衆・

衆・

真言師等が

師範なり又主君なり、

而るを

上一人より

下万民に

衆・

真言師等が

師範なり又主君なり、

而るを

衆・

真言師等が

師範なり又主君なり、

而るを

上一人より

下万民に

衆・

真言師等が

師範なり又主君なり、

而るを

衆・

真言師等が

師範なり又主君なり、

而るを

上一人より

下万民に

衆・

真言師等が

師範なり又主君なり、

而るを

衆・

真言師等が

師範なり又主君なり、

而るを

上一人より

下万民に

衆・

真言師等が

師範なり又主君なり、

而るを

いたるまであだをなすをば日月いかでか彼等が頂を照し給うべ
にちがつ いたただき てら たま

き地神いかでか彼等の足を戴き給うべき、提婆達多は仏を打ちた
かれら いたただき だいばだつた ししそんじゃ

てまつりしかば大地揺動して火炎いでにき、檀弥羅王は師子尊者
だいちようどう だんみら きそうこうてい ほうどう

の頸を切りしかば右の手・刀とともに落ちぬ、徽宗皇帝は法道が
かお

面にかなやきをやきて江南にながせしかば半年が内にゑびすの手

にかかり給いき、蒙古のせめも又かくのごとくなるべし、設い五
たま もうこ てっちせん たとい

天のつわものをあつめて鉄圀山を城とせりともかなふべからず必
にほんこく いっさいしゆじょう

ず日本国の一切衆生・兵難に値うべし、されば日蓮が法華經の
ぎょうじや なん あ にちれん ほけきやう

行者にてあるなきかはこれにても見るべし、教主釈尊記して
ぎょうじや きやうしゆしやくそんしる

云く末代悪世に法華經を弘通するものを悪口罵詈等せん人は我を
いわ まつだいあくせ ほけきやう ぐつう あつくめり

一劫が間あだせん者の罪にも百千万億倍すぎたるべしと・とかせ
いつくつ つみ せんまん

給へり、而るを今の日本国の国主・万民等・雅意にまかせて父母

・宿世の敵よりもいたくにくみ謀反・殺害の者よりもつよくせ

めぬるは現身にも大地われて入り天雷も身をさかざるは不審な

り、日蓮が法華經の行者にてあらざるか・もししからばを・を

きになげかし、今生には万人に・せめられて片時もやすからず

後生には惡道に墮ん事あさましとも申すばかりなし、又日蓮・

法華經の行者ならずばいかなる者の一乗の持者にてはあるべき

ぞ、法然が法華經をなげすてよ善導が千中無一・道綽が

未有一人得者と申すが法華經の行者にて候か、又弘法大師の

云く法華經を行ずるは戲論なりとかかれたるが法華經の行者な

るべきか、經文には能持是經・能説此經なんどこそとかれて候

へよくとくと申すもうはいかなるぞと申すもうに於諸經中しよきよう最在其上と
申して大日經・華嚴經・涅槃經・般若經等に法華經はすぐれて
候なりと申す者をこそ經文きようもんには法華經の行者とはとかれて候
へ、もし經文のごとくならば日本国に仏法わたて七百余年、
伝教大師と日蓮とが外は一人も法華經の行者はなきぞかし、い
かにいかにとをもうところに頭破作七分口則閉塞のなかりけるは
道理にて候いけるなり、此等は浅き罰なり但一人・二人等のこと
なり、日蓮は閻浮第一の法華經の行者なり此れをそしり此れを
あだむ人を結構せん人は閻浮第一の大難にあうべし、これは
日本国をふりゆるがす正嘉の大地震一天を罰する文永の大彗星等
なり、此等をみよ仏滅後の後・仏法を行ずる者にあだをなすとい

へども今のごとくの大難は一度もなきなり、南無妙法蓮華經と
いっさいしゅじょう

一切衆生にすすめたる人・一人もなし、此の徳はたれか一天に
まなこ

眼を合せ四海に肩をならぶべきや。

疑つて云く設い正法の時は仏の在世に對すれば根機劣なり
うたがい いわ たといしゅほう

とも像末に對すれば最上の上機なり、いかでか正法の始に
さいじょうき

法華經をば用いざるべき・随つて馬鳴・竜樹・提婆・無著等も
ほけきょうもち

正法一千年の内にこそ出現せさせ給へ、天親菩薩は千部の論師
しゅつげん

・法華論を造りて諸經の中第一の義を存す真諦三蔵の相伝に
ほつけるん つく

云く月支に法華經を弘通せる家・五十余家・天親は其の一也と已
いわ がっし ほけきょう ぐつう

上・正法なり、像法に入つては天台大師・像法の半に漢土に
しゅつげん

出現して玄と文と止との三十巻を造りて法華經の淵底を極めた
やめん

り、ぞうほう 像法の末に伝でんぎょうだいし 教大師・日本に出現して天台大師の円慧・円えんね

定の二法を我が朝あしたに弘通せしむるのみならず円頓の大戒場をだいかい

叡山えいざんに建立こんりゆうして日本一州にほん皆同じく円戒の地になして上一人よりかみいちにん

下万民ばんみんまで延暦寺を師範と仰えんりやくじがせ給う豈に像法の時・法華經のほけきょう

広宣流布こうせんるふにあらずや、答えて云いわく如来の教法は必ず機きに随したがうと

いう事は世間の学者せけんの存知なり、しかれども仏教はしからず・ぶつきょう

上根じょうこん・上智じょうちの人のために必ず大法だいほうを説くならば初成道の時しじょうどうなん

ぞ法華經ほけきょうをと給たまはざる正法しょうほうの先五百年さきに大乘經だいじょうきょうを弘通すべ

し、有縁うえんの人に大法だいほうを説かせ給うならば浄飯大王・摩耶夫人じょうばんだいおう まやふじんに

観仏三昧經かんぶつさんまい・摩耶經まやをとくべからず、無縁むえんの悪人あくにん謗法ほうの者に秘法ひほう

をあたえずかくとくびくば覺徳比丘むりようは無量の破戒はかいの者に涅槃經ねはんぎょうをさづくべから

ふぎようぼさつ ひぼう ししゅう

ほけきよう ぐつう

ず、不輕菩薩は誹謗の四衆に向つていかに法華經をば弘通せさせ

給いしぞ、されば機きに随したがつて法を説くと申すは大なる僻見ひゃつけんなり。

問うて云く竜樹・世親等は法華經の実義をば宣べ給わずや、

答えて云く宣べ給はず、問うて云く何なる教をか宣べ給いし、答

えて云く華嚴・方等・般若・大日經等の權大乘・顯密の諸經

をのべさせ給いて法華經の法門をば宣べさせ給はず、問うて云く

何をもつてこれをしるや答えて云く竜樹菩薩の所造の論・三十

万偈而れども尽して漢土・日本にわたらざれば其の心しりがたし

といえども漢土にわたれる十住毘婆娑論・中論・大論等をもつて

天竺の論をも比知して此れを知るなり。

疑つて云く天竺に残る論の中にわたれる論よりも勝れたる論

やあるらん、答えて云く竜樹菩薩の事は私に申すべからず仏・

しる^{たま}記し給う我が滅後に竜樹菩薩と申す人・南天竺に出ずべし彼の

てんじく

人の所詮は中論という論に有るべしと仏記し給う、随つて竜樹

しよせん

したが

りゆうじゆ

ぼさつ^{てんじく}菩薩の流天竺に七十家あり七十人ともに大論師なり、彼の七十家

ぼさつ

ろんし

の人人は皆中論を本とす中論四卷・二十七品の肝心は因縁所生

ひとびと

みな

かんじん

いんねんしよしよう

法の四句の偈なり、此の四句の偈は華嚴・般若等の四教三諦の

げ

げ

けこん

はんにや

しきようさんたい

法門なりいまだ法華開会の三諦をば宣べ給はず。

ほうもん

ほっけかいえ

さんたい

のべ

たま

疑つて云く汝がごとくに料簡せる人ありや、答えて云く

うたがい

いわ

なんじ

りようけん

いわ

天台云く「中論を以て相比すること莫れ」又云く「天親・竜樹

てんだいいわ

もつ

なか

いわ

てんじん

りゆうじゆ

内鑒冷然して外は時の宜きに適う」等云云、妙楽云く「破会を

しか

よろし

かな

うんぬん

みようらくいわ

破会を

論ぜば未だ法華に若かざる故に」云云、從義の云く「竜樹・

いまい

ほっけ

し

ゆえ

うんぬん

い

りゆうじゆ

竜樹・

てんじんいま てんだい
天親未だ天台に若かず」云云、問うて云く唐の末に不空三蔵一卷
の論をわたす其の名を菩提心論となづく竜猛菩薩の造なり云云、
弘法大師云く「此の論は竜猛千部の中の第一肝心の論」と云云、
答えて云く此の論一部七丁あり竜猛の言ならぬ事处处に多し
故に目錄にも・或は竜猛・或は不空と両方にいまだ事定まらず、
其の上此の論文は一代を括れる論にもあらず荒量なる事此れ多
し、先ず唯真言法中の肝心の文あやまりなり其の故は文証・
現証ある法華經の即身成仏をばなきになして文証も現証もあ
とかたもなき真言經に即身成仏を立て候又唯という唯の一字は
第一のあやまりなり、事のていを見るに不空三蔵の私につくりて
候を時の人にをもくせさせんがために事を竜猛によせたるか

そ ふくうさんぞう あやまり

其の上不空三蔵は誤る事かずをほし所謂法華經の觀智の儀軌に

じゆりようぼん あみだぶつ

まなこ

びやつけんだらにぼん

じんりきぼん

寿量品を阿弥陀仏とかける眼の前の大僻見陀羅尼品を神力品

ぞくるいぼん

きようまつ

くだ

これら

の次にをける属累品を経末に下せる此等はいうかひなし、さる

てんだい

だいじようかい

こうてい

せんじ

もう

かとみれば天台の大乗戒を盗んで代宗皇帝に宣旨を申し五台山

てんだい

だいじようかい

しんこん

きようそう

てんだいしゅう

の五寺に立てたり、而も又真言の教相には天台宗をすべしとい

おおわく

しか

しんこん

きようそう

てんだいしゅう

せんじ

もう

えりかたがた誑惑の事どもなり、他人の訳ならば用ゆる事もあり

きようろん

たにん

もち

がっし

かんど

なん此の人の訳せる経論は信ぜられず、総じて月支より漢土に

きようろん

くやく

しんやく

きようろん

がっし

かんど

らじゅうさんぞう

経論をわたす人・旧訳・新訳に一百八十六人なり羅什三蔵一人

ひとびと

あらわ

うたがい

いわ

そ

ふくうさんぞう

を除いてはいづれの人人も・らざるはなし、其の中に不空三蔵は

こと

あやまり

おおわく

あらわ

うたがい

いわ

そ

ふくうさんぞう

殊に誤多き上誑惑の心顯なり、疑つて云く何をもつて知るぞ

らじゅうさんぞう

ほか

ひとびと

あらわ

うたがい

いわ

そ

ふくうさんぞう

や羅什三蔵より外の人人はあやまりなりとは汝が禅宗・念仏・

らじゅうさんぞう

ほか

ひとびと

あらわ

うたがい

いわ

そ

ふくうさんぞう

眞言等の七宗を破るのみならず漢土・日本にわたる一切の訳者を
用いざるかいかん、答えて云く此の事は余が第一の秘事なり委細
には向つて問うべし、但しすこし申すべし羅什三蔵の云く我漢土
の一切経を見るに皆梵語のごとくならずいかでか此の事を顯す
べき、但し一の大願あり身を不浄になして妻を帶すべし舌計り
清浄になして仏法に妄語せじ我死なば必やくべし焼かん時舌焼
けるならば我が経をすてよと常に高座にしてとかせ給しなり、
上一人より下万民にいたるまで願じて云く願くは羅什三蔵より後
に死せんと、終に死し給う後焼きたてまつりしかば不浄の身は皆
灰となりぬ御舌計り火中に青蓮華生て其の上にあるにあり五色の光明
を放ちて夜は昼のごとく昼は日輪の御光をうばい給いき、さてこ

いっさい

きようぎよう

らじゅうさんぞう

きようぎよう

そ一切の訳人の経経は軽くなりて羅什三蔵の訳し給える経経
ことほけきようかんど
殊に法華経は漢土にやすやすとひろまり給いしか。

うたがい

いわ

らじゅういぜん

いご

ぜんむいふくう

疑

つて

云く

羅什已前はしかるべし已後の善無畏不空・等は

いご

ぜんむいふくう

等

いかん

如何、

答えて

云く已後なりとも訳者の舌の焼けるをば・ありけり

やくしゃ

いご

ぜんむいふくう

等

如何、

答えて

云く已後なりとも訳者の舌の焼けるをば・ありけり

いご

いご

やくしゃ

いご

いご

ぜんむいふくう

等

としるべしされば日本国に法相宗のはやりたりしを伝教大師責

にほんこく

ほうそうしゅう

いは

いご

ぜんむいふくう

等

めさせ給いしには羅什三蔵は舌焼けず玄奘・慈恩は舌焼けぬと

たま

らじゅうさんぞう

げんじよう

じおん

てんだいほつけしゅう

いは

いご

ぜんむいふくう

等

せめさせ給いしかば桓武天王は道理と・をばして天台法華宗へは

たま

かんむ

どうり

をばして

てんだいほつけしゅう

いは

いご

ぜんむいふくう

等

うつらせ給いしなり、涅槃経の第三・第九等をみまいらすれば我

たま

ねはんぎよう

だいご

をみまいら

すれば

いは

いご

ぜんむいふくう

等

が仏法は月支より他国へわたらん時、多くの謬誤出来して衆生

ぶつぽう

がっし

たこく

とき

あやまりしゆつたい

いご

いご

ぜんむいふくう

等

の得道うすかるべしととかれて候、されば妙楽大師は「並びに

とくどう

みようらくだいし

なら

いご

いご

いご

いご

ぜんむいふくう

等

進退は人に在り何ぞ聖旨に関らん」とこそあそばされて候へ、今

しんたい

なん

むね

かかわ

いご

いご

いご

ぜんむいふくう

等

進退は人に在り何ぞ聖旨に関らん」とこそあそばされて候へ、今

しんたい

なん

むね

かかわ

いご

いご

いご

ぜんむいふくう

等

進退は人に在り何ぞ聖旨に関らん」とこそあそばされて候へ、今

しんたい

なん

むね

かかわ

いご

いご

いご

ぜんむいふくう

等

進退は人に在り何ぞ聖旨に関らん」とこそあそばされて候へ、今

しんたい

なん

むね

かかわ

いご

いご

いご

ぜんむいふくう

等

進退は人に在り何ぞ聖旨に関らん」とこそあそばされて候へ、今

しんたい

なん

むね

かかわ

いご

いご

いご

ぜんむいふくう

等

進退は人に在り何ぞ聖旨に関らん」とこそあそばされて候へ、今

しんたい

なん

むね

かかわ

いご

いご

いご

ぜんむいふくう

等

ひとびと
の人人いかに經のままに後世をねがうともあやまれる 經經のま

とくどう

まにねがはば得道も・あるべからず、しかればとて仏の御とがに

ぶつきよう

だいしよう

ごんじつ

けんみつ

はあらじとかかれて候、仏教を習ふ法には大小・権実・顯密は

さてをくこれこそ第一の大事にては候らめ。

だいいち

だいい

そうろう

うたがい

疑

いわ

しようほう

ろんし

ないしん

ほけきよう

じつぎ

けんみつ

しよきよう

ちようか

顯密の諸經に超過してあるよしはしろしめしながら外には宣説

せんぜつ

せずして但権大乘計りを宣べさせ給うことはしかるべしとはを

ごんだいじようばか

のべ

たま

ばへねども其の義はすこしきこえ候いぬ、像法一千年の半に

そ

ぞうほう

なかば

てんだいちしやだいいししゅつげん

だいもく

みようほうれんげきよう

ごじ

げんぎ

天台智者大師出現して題目の妙法蓮華經の五字を玄義十卷・一

千枚にかきつくし、

もんく

文句十卷には始め如是我聞より終り作礼而去

さらいにこ

にいたるまで一字・一句に因縁・約教・本・迹・觀心の四の釈

いっく

いんねん

やつきよう

かんじん

をならべて又一千枚に尽し給う已上玄義・文句の二十卷には
いっさいきよう ほかきよう たいかい じっぽう
一切經の心を江河として法華經を大海にたとえ十方界の仏法の
つゆ しずく みようほうれんげきよう たいかい さま
露一 も漏さず妙法蓮華經の大海に入れさせ給いぬ、其の上
てんじく だいろん しょ かんど
天竺の大論の諸義・一点ももらさず漢土・南北の十師の義破すべ
きをばこれをはし取るべきをば此れを用う、其の上止觀十卷を注
して一代の觀門を一念にすべ十界の依正を三千につづめたり、
いちだい かんもん いちねん じゅつかい えしやう さんぜん
此の書の文体は遠くは月支・一千年の間の論師にも超え近くは
しな にんし すぐ ゆえ さんろんしゅう きちそうだいし
尸那・五百年の大師の釈にも勝れたり、故に三論宗の吉蔵大師
せんだつ ちやうじや てんだいだいし
・南北一百余人の先達と長者らをすすめて天台大師の講經を聞
けと勧むる状に云く「千年の興五百の実復今日に在り乃至南岳の
えいしやう てんだい じつまたきやう ないしなんがく
觀聖・天台の明哲・昔は三業住持し今は二尊に紹係す豈
あに

あにただかんろ 止甘呂を震旦に灑ぐのみならん亦当に法鼓を天竺に震うべし、
またまさ

生知の妙悟魏晉以来典籍風謡実に連類無し乃至禅衆一百余の僧と
ちしゃだいし みよこ いらい ないし

共に智者大師を奉請す等云云、修南山の道宣律師・天台大師
うんぬん しゅうなんざん どうせんりつし てんだいだいし

を讃歎して云く「法華を照了すること高輝の幽谷に臨むが若く
さんたん いわ ほつけ しゅうりよう こうき ゆうこく のぞ もし

摩訶衍を説くこと長風の太虚に遊ぶに似たり仮令文字の師・千羣
まかえん たいこ たといもんじ ぐん

万衆ありて彼の妙弁を数め尋ぬとも能く窮むる者無し、乃至義月
あつめ たず よ きわ ないし

を指すに同じ乃至宗一極に帰す云云、華嚴宗の法蔵大師・天台
ないし うんぬん けこんしゅう ほうぞうだいし てんだい

を讃して云く「思禅師智者等の如き神異に感通して迹登位に参わ
いわ ぜん ちしや こと じんい しゃく まじ

る靈山の聴法憶い今に在り」等云云、真言宗の不空三蔵・含光
りょうぜん うんぬん しんこんしゅう ふくうさんぞう ものがたり いわ

法師等師弟共に真言宗をすてて天台大師に帰伏する物語に云く
ほっし してい しんこんしゅう てんだいだいし きふく い

高僧伝に云く「不空三蔵と親たり天竺に遊びたるに彼に僧有り問
こうそう い ふくうさんぞう まのあ てんじく かしこ

うていわ曰く大唐に天台てんだいの迹教有り最も邪正じゃせいを簡えらび偏円へんえんを曉あきらむるに

堪たえたり能く之これを訳して將まさに此土しどに至らしむ可べきや」等云云、此

の物語ものがたりは含光が妙樂大師みょうらくだいしにかたり給たましなり、妙樂大師・此の

物語ものがたりを聞いて云く「豈中国あにちゅうごくに法を失うしないて之これを四維ししいに求むるに

非あらずや而も此方しか識このかたしること有ある者少し魯人ろじんの如ごときのみ」等云云、身毒

国てんだいの中に天台三十巻のごとくなる大論だいろんあるならば南天の僧そうほういかで

か漢土かんどの天台てんだいの釈えんぶだいをねがうべき、これあに像法ぞうほうの中に法華經ほけきょうの

実義じつぎ顯あらわれて南閻浮提えんぶだいに広宣流布こうせんるふするにあらずや、答こたえて云く正法しょうほう

一千年・像法ぞうほうの前四百年・已上ぶつめつ仏滅後・一千四百余年にいま

論師ろんしの弘通くつうし給たまはざる一代超過いちだいちやうかの円定・円慧えんねを漢土かんどに弘通くつうし給たまう

のみならず其その声月氏ながつしまでもきこえぬ、法華經ほけきょうの広宣流布こうせんるふにはに

たれどもいまだ円頓えんどんの戒壇かいだんを立てられず 小乗しょうじょうの威儀いぎをもつて円
の慧定じょうに切りつけるはすこし便たよりなきにたり、例せば日輪にちりんの蝕
するがごとし月輪のかけたるに似たり、何いかにいわうや天台大師てんだいだいしの
御時おんときは大集経だいしつきょうの読誦多聞堅固どくじゅたぶんけんこの時にあひあていまだ広宣流布こうせんるふ
の時にあらず。

問いうて云いく伝でん 教大師きょうだいしは日本国にほんこくの土ひとなり桓武かんむの御宇ぎように出世しゅつせして
欽明きんめいより二百余年が間の邪義じゃぎをなんじやぶり天台大師てんだいだいしの円慧えんね・円
定ぎんめいをせんじ給たまうのみならず、鑒真和尚がんじんわじょうの弘通くわうつうせし日本にほん小乗しょうじょうの三
処かいだんの戒壇えいざんをなんじやぶり叡山えいざんに円頓えんどんの大乗別受戒だいじようべつじゅかいを建立こんりゆうせり、
此だいじの大事ぶつめつは仏滅後ぶつめつ・一千八百年が間の身毒けんどく・尸那しな・扶桑ふそう乃至ないし一
閻浮提えんぶだい第一だいいちの奇事きじなり、内証ないしょうは竜樹りゅうじゆ・天台等てんだいには・或あるは劣るに

もや・或あるは同じくもやあるらん、仏ぶつ法ぽうの人をすべて一法となせる

事ことは竜樹りゅうじゆ・天親てんじんにもこえ南岳なんがく・天台てんだいにも・すぐれて見えさせ給たま

うなり、総じては如来御入滅にょらいにゆうめつの後・一千八百年が間・此の二人

こそ法華經ほけきやうぎやうじやの行者ぎやうじやにてはをはすれ、故ゆえに秀句しゅうくに云いく「經きやうに云いく

若もし須弥しゆみを接とつて他方無数の仏土たほうに擲なげ置まかんも亦未またいまだこれ難がたし

とせず乃至若ないしもし仏の滅度惡世めつどあくせの中に於おいて能よく此の經を説しかん是

則すなわちこれ難かたし云云、此經を釈しゃくして云いく浅やすは易やすく深かたは難かたしとは釈迦しゃか

の所判しよはんなり浅あさきを去さりて深ふかきに就つくは丈夫じやうぶの心なり天台大師てんだいだいしは釈しゃくに

信順しんじゆんし法華宗を助ほつけて震旦しんたんに敷揚ふようし叡山えいざんの一家てんだいは天台そうじやうに相承そうじやうし

法華宗を助ほつけて日本にほんに弘通くつうす「云云、釈しゃくの心は賢劫第九の滅・

人壽百歳の時より如来在世五十年滅後にんじゆうにょらいざいせめつご・一千八百余年が中間ちゆうげんに

ゆじゆん

ばんり

あるひと

高さ十六万八千由旬・六百六十二万里の金山を有人五尺の小身の
手をもつて方一寸・二寸等の瓦礫をにぎりて一丁二丁までなく

かた
すずめ

かわらこいし

てつちせん

るがごとく雀鳥のとぶよりもはやく鉄圀山の外へなぐる者はあり

ほけきよう

まつぼう

とも法華經を仏のとかせ給いしやうに説かん人は末法にはまれな

てんだいだいし

でんぎようだいし

ぶつせつ
そうじ

たま

るべし、天台大師・伝教大師こそ仏説に相似してとかせ給いた

てんじく

ろんし

ほけきよう

る人にてをはすれとなり、天竺の論師はいまだ法華經へゆきつき

たま

かんど

てんだい
いぜん

にんし

ある

ある

じおん

給はず漢土の天台已前の人師は・或はすぎ・或はたらず、慈恩・

ほうぞう

ぜんむい

ひとびと

これら

法蔵・善無畏等は東を西といふ天を地と申せる人人なり、此等は

でんぎようだいし

じさん

いぬ

えんりやく

伝教大師の自讃にはあらず、去る延暦二十一年正月十九日高雄

かんむこうてい
みゆき

ろくしゅうななだいじ

せきとく

ぜんぎ

しょうゆう

山に桓武皇帝行幸なりて六宗七大寺の碩徳たる善議・勝猷・

ほうき

ちようにん

けんぎよく

あんぶく

ごんそう

しゅえん

じこう

げんよう

さいこう

どうしょう

奉基・寵忍・賢玉・安福・勤操・修円・慈誥・玄耀・歳光・道証

こうしょう

・光証・観敏等の十有余人、最澄法師と召し合せられて宗論あ

ある

りしに・或は一言に舌を巻いて二言三言に及ばず皆一同に頭を

さんろん

てんほうりん

ほつそう

かたづけ手をあざう、三論の二蔵・三時・三転法輪・法相の三時

けごんしゅう

しきよう

こんぼん

みなたいこう

・五性・華嚴宗の四教・五教・根本枝末・六相・十玄・皆大綱を

おほいえ

だいたく

まんどう

やぶらる、例せば大屋の棟梁のをれたるがごとし十大徳の慢幢

そ

てんしおおい

おどろ

たま

も倒れにき、爾の時・天子大に驚かせ給いて同二十九日に

ひろよ・くにみち

かさ

ろくしゅう

おお

弘世・国道の両吏を勅使として重ねて七寺六宗に仰せ下れしか

きふく

の

いわ

ひそかてんだい

じよ

ば各各帰伏の状を載せて云く「竊に天台の玄疏を見れば総じて

しゃかいちだい

くく

ことごとそ

あらわ

なく

ひと

釈迦一代の教を括つて悉く其の趣を顕すに通ぜざる所無く独り

しよしゅう

こ

こと

そ

しよせつじんじん

みようり

諸宗に逾え殊に一道を示す其の中の所説甚深の妙理なり七箇の

ろくしゅう

いま

かつ

いま

大寺・六宗の学生昔より未だ聞かざる所曾て未だ見ざる所なり

さんろん ほっそう

あらそ かんえん

ごと と しゅうぜん

すで

三論・法相久年の諍い渙焉として氷の如く釈け照然として既に

あきら なおうんむ ひら

ぐけ

このかた

明かに猶雲霧を披いて三光を見るがごとし聖徳の弘化より以降今

きょうろんそ

あまた

に二百余年の間講ずる所の経論其の数多く彼此理を争えども

そ うたがいいま

しか

えんしゅういま

せんよう

けだ

其の疑未だ解けず、而るに此の最妙の円宗未だ闡揚せず蓋し

もっ

おもんみ

以て此の間の羣生未だ円味に応わざるか、伏して惟れば聖朝久し

によらい

かな

ざり

すなわ

く如来の付を受け深く純円の機を結び一妙の義理始めて乃ち

こうけん ろくしゅう

がくしゃ

き

がんりよう

ことごと

興顕し六宗の学者初めて至極を悟る此の界の含靈今より後悉く

みょうえん

ひがん

わた

ないしぜんぎ

妙円の船に載り早く彼岸に済る事を得ると謂いつべし、乃至善議

ひか

すなわ

けみ

あら

なん

等牽れて休運に逢い乃ち奇詞を閲す深期に非ざるよりは何ぞ聖世

たく

かんど

かじよう

に託せんや」等云云、彼の漢土の嘉祥等は百余人をあつめて

てんだいだいし

しょうにん

いまにほん

でんぎようだいし

天台大師を聖人と定めたり、今日日本の七寺二百余人は伝教大師

しょうにん

を聖人とがうしたてまつる、仏の滅後二千余年に及んで両国に

しょうにん

しゅつげん

そ

てんだいだいし

みぐ

えんどんだいかい

えいざん

こんりゆう

しゅつげん

そ

てんだいだいし

みぐ

えんどんだいかい

えいざん

こんりゆう

しゅつげん

そ

てんだいだいし

みぐ

えんどんだいかい

えいざん

建立し給う此れ豈像法の末に法華經広宣流布するにあらずや、

こんりゆう

しゅつげん

そ

てんだいだいし

みぐ

えんどんだいかい

えいざん

答えて云く迦葉・阿難等の弘通せざる大法を馬鳴・竜樹・提婆

こんりゆう

しゅつげん

そ

てんだいだいし

みぐ

えんどんだいかい

えいざん

天親等の弘通せる事前の難に顕れたり、又竜樹・天親等の流布

こんりゆう

しゅつげん

そ

てんだいだいし

みぐ

えんどんだいかい

えいざん

し残し給える大法天台大師の弘通し給う事又難にあらはれぬ、又

こんりゆう

しゅつげん

そ

てんだいだいし

みぐ

えんどんだいかい

えいざん

天台智者大師の弘通し給はざる円頓の大戒を伝教大師の建立せ

こんりゆう

しゅつげん

そ

てんだいだいし

みぐ

えんどんだいかい

えいざん

させ給う事又顯然なり、但し詮と不審なる事は仏は説き尽し給え

こんりゆう

しゅつげん

そ

てんだいだいし

みぐ

えんどんだいかい

えいざん

ども仏滅後に迦葉・阿難・馬鳴・竜樹・無著・天親乃至・天台

こんりゆう

しゅつげん

そ

てんだいだいし

みぐ

えんどんだいかい

えいざん

・伝教のいまだ弘通しましまさぬ最大の深密の正法經文の面

こんりゆう

しゅつげん

そ

てんだいだいし

みぐ

えんどんだいかい

えいざん

に現前なり、此の深法・今末法の始五五百歳に一閻浮提に広宣

こんりゆう

しゅつげん

そ

てんだいだいし

みぐ

えんどんだいかい

えいざん

るふ
流布すべきやの事不審極り無きなり。

問ういかなる秘法ぞ先ず名をきき次に義をきかんとをもつ此の

事もし実事ならば釈尊の二度世に出現し給うか上行菩薩の

重ねて涌出せるか・いそぎいそぎ慈悲をたれられよ、彼の玄奘

三蔵は六生を経て月氏に入りて十九年・法華一乗は方便教・

小乗・阿含経は眞実教、不空三蔵は身毒に返りて寿量品を

阿弥陀仏とかかれたり、此等は東を西という日を月とあやまてり

身を苦めてなにかせん・心に染てようなし、幸い我等末法に生れ

て一步をあゆまずして三祇をこゑ頭を虎にかわずして無見頂相

をゑん、答えて云く此の法門を申さん事は経文に候へばやすか

るべし但し此の法門には先ず三の大事あり大海は広けれども死骸

をとどめず大地は厚けれども不孝の者をば載せず、仏法には五逆
をたすけ不孝をばすくう但し誹謗一闡提の者持戒にして第一なる
をばゆるされず、此の三のわざはひとは所謂念仏宗と禅宗と
真言宗となり、一には念仏宗は日本国に充滿して四衆の口あ
そびとす、二に禅宗は三衣一鉢の大慢の比丘の四海に充滿して
一天の明導と・をもへり、三に真言宗は又彼等の二宗にはにる
べくもなし叡山・東寺・七寺・園城・或官主・或は御室・或は
長吏・或は検校なりかの内侍所の神鏡燼灰となりしかども
大日如来の宝印を仏鏡とたのみ宝剣・西海に入りしかども五大尊
をもつて国敵を切らんと思へり、此等の堅固の信心は設い劫石は
ひすらぐとも・かたぶくべしとはみへず大地は反覆すとも疑心

をこりがたし、彼の天台大師の南北をせめ給^{たま}いし時も此の宗はい

まだわたらず此の伝教大師の六宗をしゑた^{たま}げ給^{たま}いし時ももれ

ぬ、かたがたの強敵^{こつてき}をまぬがれてかへつて大法^{だいほう}をかすめ失^{うしな}う、其^その

でんぎようだいし おんでしじかくだいし

上伝教大師の御弟子慈覚大師・此の宗をとりたてて叡山^{えいざん}の

天台宗をかすめをとして一向・真言宗になししかば此の人には

誰^{たれ}の人が敵をなすべき、かかる僻見^{びやくけん}のたよりをえて弘法大師の

じゃぎ

邪義をもとがむる人もなし、安然和尚^{あんねんわじよう}すこし弘法^{こうぼう}を難^{なん}ぜんとせし

ただけこんしゆう

かども只華嚴宗のところ計^{ばか}りとがむるににてかへて法華經をば

だいにちきよう

大日經に対して沈めはてぬ、ただ世間^{せけん}のたて入の者のごとし。

いわ

問うて云く此の三宗の謬^{みようご}如何^{いかん}答えて云く浄土宗は齊の世に

どんらんほつし もう

さんろんしゆう

りゅうじゅうばさつ じゅうじゅうびばしやろん

曇鸞法師と申す者あり本は三論宗の人竜樹菩薩の十住毘婆娑論

なんぎやうじつ

を見て難行道・

易行道を立てたり、

道綽禅师という者あり

唐の

もと ねはんぎやう

世の者本は涅槃經をかうじけるが

曇鸞法師が浄土にうつる筆を見

ねはんぎやう

じやうど

じやうど

を立てたり、又

て涅槃經をすてて浄土にうつて

聖道

浄土二門を立てたり、又

どうしゆく

でし ぜんどう

そうぎやう

しやうぎやう

にほんこく

道綽が弟子に善導という者あり

雑行

正行を立て、

日本国に

まつぼう

末法に入つて二百余年

後鳥羽院の御宇に

法然というものあり

いっさい

どうぞく

一切の道俗をすすめて云く

仏法は時機を本とす

法華經・大日經

だいにかきやう

だいにかきやう

だいにかきやう

てんだい

しんこん

はつしゆく

いちだい

だいしやう

けんみつ

ごんじつ

・天台・真言等の八宗

・九宗一代の大小

・顯密

・権実等の

しよしゆく

じやうこん

じやうち

しやうぞう

き

のためなり、

末法に入

まつぼう

諸宗等は上根

・上智の正像

二千年の機

のためなり、

末法に入

まつぼう

りてはいかに功をなして行ずるとも

其の益あるべからず、

其の上

そ

其の上

そ

其の上

みだねんぶつ

・弥陀念仏にまじへて行ずるならば

念仏も

往生すべからず

此れ

こ

此れ

りゆうじゆぼさつ

どんらんほつし

なんぎやうじつ

なんぎやうじつ

なんぎやうじつ

なんぎやうじつ

わたくしに申すには

あらず

竜樹菩薩

・曇鸞法師は

難行道となづ

難行道となづ

難行道となづ

難行道となづ

難行道となづ

け、道^{どう} 綽^{しやく}は未^み有^{いう}にんとくしゃ^{せんどう}ときらひ善^{ぜん}導^{どう}は千^{せん}中^{ちゆう}無^む一^{いつ}とさだめたり、

これら^{たしゆう}

此^こ等^{とう}は他^た宗^{しゆう}なれば御^お不^ふ審^{しん}も・あるべし、慧^え心^{しん}・先^{せん}徳^{とく}にすぎさせ給^{たま}

へる天台^{てんだい}・真^{しん}言^{ごん}の智^ち者^{しゃ}は末^{まつ}代^{だい}にをはすべきか彼の往^{おう}生^{じゆう}要^{よう}集^{しゆう}には

けんみつ きようほう

顕^{けん}密^{みつ}の教^{きよう}法^{ぽう}は予^よが死^し生^{せい}をはなるべき法^{ほつ}にはあらず、又^{また}三^{さん}論^{ろん}の永^{えい}観^{かん}

が十^{じゅう}因^{いん}等^{とう}をみよされば法^{ほつ}華^け・真^{しん}言^{ごん}等をすて一向^{いっこう}に念^{ねん}仏^{ぶつ}せば

じゆつそくじゆつしやう ひやくそくひやくしやう

十^{じゅう}即^{じく}十^{じゅう}生^{せい}・百^{ひやく}即^{じく}百^{ひやく}生^{せい}とすすめければ、叡^{えい}山^{ざん}・東^{とう}寺^じ・園^{おん}城^{じやう}

・七^{しち}寺^じ等^{とう}始^しめは諍^{じやう}論^{ろん}するやうなれども、往^{おう}生^{じゆう}要^{よう}集^{しゆう}の序^{しよ}の詞^{ことば}・

道理^{どうり}かとみへければ顕^{けん}真^{しん}座^ざ主^{しゅ}落^{らく}ちさせ給^{たま}いて法^{ほう}然^{ねん}が弟^で子^しとなる、

其^その上^{たとい}設^{ほう}い法^{ねん}然^{でし}が弟^み子^だとならぬ人^{たねん}々^{ぶつ}も弥^た陀^{ぶつ}念^た仏^{ぶつ}は他^た仏^{ぶつ}に^{たぶつ}にるべく

もなく口^くずさみとし心^{しん}よせにをもひければ日^に本^{ほん}国^{こく}・皆^{みな}一同^{いどう}に

法^{ほう}然^{ねん}房^{ぼう}の弟^で子^しと見^みへけり、此^この五^{いつ}十^{てん}年^しが間^{かん}・一^{いつ}天^{てん}四^し海^{かい}・一^{いつ}人^{じん}もな

く法然ほうねんが弟子でしとなる法然ほうねんが弟子でしとなりぬれば日本国にほんこく一人もなく

ほうぼう

謗法の者となりぬ、

譬たとへば

千人の子が一同に一人の親を殺害せば

千人共に五逆ごぎやくの者なり一人阿鼻あびに堕おちなば余人堕おちざるべしや、

結句けっくは法然ほうねん・流罪るさいをあだみて惡靈あくりようとなつて我並ならびに弟子等でしをと

がせし国主山寺こくしゅの僧等が身に入つて・或あるは謀反あるを・をこし・或あるは

惡事をなして皆閑東みなかんとうにほろばされぬ、わづかにのこれる叡山えいざん・

東寺等の諸僧しよそうは俗男ぞくなん・俗女ぞくじよにあなづらるること猿猴えんこうの人にわらは

れ・俘囚えぞが童子どうじに蔑如べつじよせらるるがごとし、禅宗ぜんしゆうは又此の便たよりを得

て持齋等じさいとなつて人の眼まなこを迷まどかし・たつとげなる氣色なれば・

いかに・ひがほうもんを・いぬくるへども失とがとも・をばへず、

禅宗ぜんしゆうと申もうす宗は教外別伝きやうがいべつでんと申もうして釈尊しやくそんの一切經いっさいきやうの外かしに迦葉しやう

そんじゃ

尊者にひそかにささやかせ給へり、されば禅宗をしらずして

いっさいきよう

なら

一切経を習うものは、犬の雷をかむがごとし、猿の月の影を

うんぬん

ゆえ

にほんこく

ふこう

ふぼ

とるにたり云云、此の故に日本国の中に不孝にして父母にすて

ゆえ

しゅくん

じゃく

ほっし

られ無礼なる故に、主君にかんどうせられ・あるいは若なる法師

かなえ じゃほう

等の学文にもものうき遊女のものぐるわしき本性に叶る邪法なるゆ

みな

じさい

ひやくせい

いなむし

へに皆一同に持斎になりて国の百姓をくらう蝗虫となれり、し

てんげん

しんこんしゅう

かれば天は天眼をいからかし地神は身をふるう、真言宗と申す

かみ

びやつけん

は上の二のわざはひには・にるべくもなき大僻見なりあらあら

もう

いわゆるだいとう

げんそうこうてい

ぎょう

ぜんむいさんぞう

此れを申すべし、所謂大唐の玄宗皇帝の御宇に善無畏三蔵・

こんこうちさんぞう

ふくうさんぞう

だいにちきょう

こんこうちようきょう

そしつちきょう

がっし

金剛智三蔵・不空三蔵、大日経・金剛頂経・蘇悉地経を月支

よりわたす、此の三経の説相分明なり其の極理を尋ねれば

えにはにいちじょうそ

会二破二の一乗其の相を論ずれば印と真言と計りなり、尚華嚴

はんにや

そうたい

いちじょう

およ

てんだいしゅう

にぜん

べつえん

なわけん

・般若の三一相對の一乗にも及ばず天台宗の爾前の別円程もな

そうつう

おもて

ぜんむいさんぞう

きょうもん

し但蔵通二教を面とするを善無畏三蔵をもはく此の經文をあら

いだ

けこん

ほっそう

てんだいしゅう

わににいみ出す程ならば華嚴・法相にもをこつかれ天台宗にもわ

だいじ

がっし

たも

ほんい

らはれなん大事として月支よりは持ち来りぬ・さてもだせば本意

てんだいしゅう

ぜん

びやくにん

にあらずとやをもひけん、天台宗の中に一行禪師という僻人一

あじやり

人ありこれをかたらひて漢土の法門をかたらせけり、一行阿闍梨

あじやり

うちぬかれて三論・法相・華嚴等をあらあらかたるのみならず

さんろん

ほっそう

けこん

てんだいしゅう 天台宗の立てられけるやうを申しければ善無畏をもはく天台宗

ぜんむい

てんだいしゅう

は天竺にして聞きしにもなをうちすぐれてかさむべきやうもなか

てんじく

りければ善無畏一行をうちぬひて云く和僧は漢土にはこざかしき

ぜんむい

いわ

かんど

てんだいしゅう

しんこんしゅう

てんだいしゅう

者にてありけり、天台宗は神妙の宗なり今真言宗の天台宗に

しんこん

ほか

かさむところは印と真言と計りなりといふければ一行さもやと・

ぜんむいさんぞう

てんだいだいし

ほけきよう

をもひければ善無畏三蔵一行にかたて云く、天台大師の法華經に

じよ
疏をつくらせ給へるごとく大日經の疏を造りて真言を弘通せん

だいにちきよう

じよ
つく

しんこん

ぐつう

とをもう汝かきなんやと・いふければ一行が云くやすう候、但し

なんじ

いわ

ただ

いかやうにかき候べきぞ天台宗はにくき宗なり諸宗は我も我烽

てんだいしゅう

しよしゅう

いあらそいをなせども一切に叶わざる事一あり、所謂法華經の序分

いっさい
かな

いわゆるほけきよう

じよぶん

に無量義經と申す經をもつて前四十余年の經經をば其の門を打

むりようぎきよう

もう

よんじゅうよねん

きようぎよう

そ

ちふさぎ候いぬ、法華經の法師品・神力品をもつて後の經經を

ほけきよう

ほうしほん

じんりきほん

きようぎよう

ば又ふせがせぬ肩をならぶ經經をば今説の文をもつてせめ候

きようぎよう

こんせつ

大日經をば三説の中にはいづくにかをき候べきと問ひければ

だいにちきよう

そ

ぜんむいさんぞうおおい

たくら

いわ

だいにちきよう

爾の時に善無畏三蔵大に巧んで云く大日経に住心品という品あ

むりようぎきよう

よんじゅうよねん

きようぎよう

だいにちきよう

り無量義経の四十余年の経経を打ちはらうがごとし、大日経

いか

しよ

かんど

ほけきよう

だいにちきよう

の入漫陀羅已下の諸品は漢土にては法華経・大日経とて二本な

てんじく

いつきよう

しゃかぶつ

しゃりほつみるく

れども天竺にては一経のごとし、釈迦仏は舍利弗弥勒に向つて

だいにちきよう

ほけきよう

しんこん

ぱか

大日経を法華経となづけて印と真言とをすてて但理計りをとけ

らじゅうさんぞうこ

てんだいだいしこ

だいにちにやらい

るを羅什三蔵此れをわたす天台大師此れをみる、大日如来は

ほけきよう

だいにちきよう

こんごうさった

たま

こ

法華経を大日経となづけて金剛薩に向つてとかせ給う此れを

だいにちきよう

てんじく

なんじ

大日経となづく我まのあたり天竺にしてこれを見る、されば汝

だいにちきよう

ほけきよう

いちみ

がかくべきやうは大日経と法華経とをば水と乳とのやうに一味

だいにちきよう

いこんとう

みなほけきよう

となすべし、もししからは大日経は已今当の三説をば皆法華経

いちねんさんぜん

のごとくうちをとすべし、さて印と真言とは心法の一念三千に

そうごん

そうおう

ひほう

そうおう

莊嚴するならば三密相應の秘法なるべし、三密相應する程ならば
てんだいしゅう いみつ しんごん

天台宗は意密なり真言は甲なる將軍の甲鎧を帶して弓箭を横
しゅうぐん よろい たい きゅうせん

たへ太刀を腰にはけるがごとし、天台宗は意密計りなれば甲な
てんだいしゅう いみつばか

將軍の赤裸なるがごとくならんといふければ、一行阿闍梨は
しゅうぐん かはだか あじやり

此のやうにかきけり、漢土三百六十箇国には此の事を知る人な
かんど

りけるかのあひだ始めには勝劣を諍論しけれども善無畏等は人
しゅうれつ じょうろん ぜんむい

がらは重し天台宗の人人は軽かりけり、又天台大師ほどの智あ
てんだいしゅう ひとびと てんだいだいし

る者もなかりければ但日日に真言宗になりてさてやみにけり、
しんごんしゅう

年ひさしくなればいよいよ真言の誑惑の根ふかくかくれて候いけ
しんごん おおわく

り、日本国の伝教大師・漢土にわたりて天台宗をわたし給うつ
にほんこく でんぎようだいし かんど てんだいしゅう たま

いでに真言宗をならべわたす、天台宗を日本の皇帝にさづけ
しんごんしゅう てんだいしゅう にほん こうてい

しんごんしゅう　ろくしゅう　だいとく

真言宗を六宗の大徳にならばせ給う、但し六宗と天台宗の

しゅうれつ　にゆうとういぜん

勝劣は入唐已前に定めさせ給う、入唐已後には円頓の戒場を

立てう立てじの論の計りなかりけるかのあひだ敵多くしては戒場

まっぽう

の一事成りがたしとやをぼしめしけん、又末法にせめさせんとや

こうてい　おんまへ

をぼしけん皇帝の御前にしても論ぜさせ給はず弟子等にもはかば

かしくかたらせ給はず、但し依憑集と申す一卷の秘書あり七宗の

ひとびと　てんだい　ただ　えびよう　もう

人人の天台に落ちたるやうをかかれて候文なり、かの文の序に

しんごんしゅう　おあわく

真言宗の誑惑一筆みへて候弘法大師は同じき延暦年中に御

入唐青竜寺の慧果に値い給いて真言宗をならはせ給へり、御

きちよう　いちだい　しゅうれつ　たま　しんごんしゅう　たま　えんりやく

帰朝の後・一代の勝劣を判じ給いけるに第一真言・第二・華嚴

・第三法華とかかれて候、此の大師は世間の人人もつてのほかに

ほっけ　だいし　せけん　ひとびと　だいいちしんごん　けごん

重ずる人なり、但しただ仏法の事は申すにをそれあれどももつてのほ

かにあらしき事どもはんべり、此の事をあらあら・かんがへたるに

かんど

漢土にわたらせ給いては但真言しんごんの事相じそうの印・真言計りしんごんばか習ならいつたえ

て其その義理ぎりをばくはしくもさはぐらせ給はざりけるほどに日本にほんに

わたりて後大おおいに世間せけんを見れば天台宗もつてのほかにかさみたり

ければ、我が重ずる真言宗しんごんしゅうひろめがたかりけるかのゆへに本

にほんこく

なら

けごんしゅう

ほけきょう

- 62 -

日本国にして習ならいたりし華嚴宗けごんしゅうをとりいだして法華經にまされる

よしを申しけり、それも常けごんしゅうの華嚴宗けごんしゅうに申すやうに申すならば人信

ずまじとやをばしめしけんすこしいろをかえて此これは大日經だいにちきょう

りゅうもうぼさつ

ぼだいしんろんぜんむい

じつぎ

もうご

竜猛菩薩の菩提心論善無畏等の実義なりと大妄語をひきそへた

りけれども天台宗の人人てんだいしゅういたうとがめ申す事なし。

てんだいしゅう

ひとびと

もう

問うて云く弘法大師の十住心論・秘藏宝鑰二教論に云く

「此くの如き乗乗自乗に名を得れども後に望めば戲論と作す」

又云く「無明の辺域にして明の分位に非ず」又云く「第四熟蘇味

なり」又云く「震旦の人師等諍つて醍醐を盗んで各自宗に名く」

等云云、此等の釈の心如何、答えて云く予此の釈にをどろいて

一切経並びに大日の三部経等をひらきみるに華嚴経と大日経と

に対すれば法華経戲論・六波羅蜜経に対すれば盗人守護経に対す

れば無明の辺域と申す経文は一字・一句も候はず此の事はいと

はかなき事なれども此の三四百余年に日本国のそこばくの智者ど

もの用いさせ給へば定めてゆへあるかをもひぬべし、しばらく

いとやすきひが事をあげて余事のはかなき事をしらすべし、

ほけきよう だいごみ しよう

ちんずい

ろくはらみつきよう

とう

法華經を醍醐味と称することは陳隋の代なり六波羅蜜經は唐の半

はんによさんぞうこ

に般若三藏此れをわたす、六波羅蜜經の醍醐は陳隋の世には・わ

ろくはらみつきよう

だいご

ちんずい

たまた

ぼうれい

たりてあらばこそ天台大師は眞言の醍醐をば盜ませ給はめ、傍例

にほん

いわ

てんだいだいし

じんみつ

さんじきよう

さんずん

あり日本の得一が云く天台大師は深密經の三時教をやぶる三寸の

にほん

いわ

てんだいだいし

じんみつ

さんじきよう

さんずん

舌をもつて五尺の身をたつべしとののしりしを伝教大師此れを

いわ

じんみつ

とう

げんじよう

てんだい

ちんずい

ただして云く深密經は唐の始玄奘これをわたす天台は陳隋に人

ちしや

にゆうめつ

じんみつ

いご

・智者御入滅の後・数箇年あつて深密經わたれり、死して已後

ちしや

にゆうめつ

じんみつ

たまた

いご

にわたれる經をば・いかでか破り給うべきとせめさせ給いて候い

ちしや

にゆうめつ

じんみつ

たまた

いご

しかば得一はつまるのみならず舌八にさけて死し候いぬ、これは

かしこ

あつく

けごん

ほうぞうさんろん

かじようほつそう

彼にはなるべくもなき悪口なり、華嚴の法蔵三論の嘉祥法相の

げんじよう

てんだい

ないし

しよし

ごかん

いか

さんぞう

にんし

玄奘・天台等・乃至南北の諸師・後漢より已下の三蔵・人師を

みなぬすびと

皆をさえて盗人とかかれて候なり、其の上又法華經を醍醐と称す

てんだい

ることは天台等の私の言にはあらず、仏涅槃經に法華經を醍醐と

ねはんぎよう

ほけきよう

だいご

たま

てんじんぼさつ

ほけきよう

ねはんぎよう

だいご

とかせ給い天親菩薩は法華經・涅槃經を醍醐とかかれて候、

りゅうじゅぼさつ

ほけきよう

竜樹菩薩は法華經を妙藥となづけさせ給う、されば法華經等を

だいご

もう

ぬすびと

しゃか

たほう

じっぽう

しよぶつ

りゅうじゅ

醍醐と申す人・盗人ならば釈迦・多宝・十方の諸仏・竜樹・

てんじん

ぬすびと

天親等は盗人にてをはすべきか、弘法の門人等・乃至日本の東寺

こうぼう

もんじん

ないしにほん

とうじ

の真言師・如何に自眼の黒白はつたなくして弁へずとも他の鏡

しんごんし

いかん

じげん

こくびやく

わきまえ

をもつて自禍をしれ、此の外法華經を戲論の法とかかるること

じか

ほけきよう

けろん

だいにちきよう

こんごうちようきよう

きようもん

大日經・金剛頂經等にたしかなる經文をいだされよ、設い

きようもん

やくしや

あやま

たとい

かれがれ

きようぎよう

ほけきよう

けろん

彼のの經經に法華經を戲論ととかれたりとも訳者の○る事も

やくしや

あやま

あやま

あるぞかしよくよく思慮のあるべかりけるか、孔子は九思一言・

こうし

しゅうこうたん ゆあみ

周公旦は沐には三にぎり食には三はかれけり外書のはかなき

せけん

なら

ちじん

世間の浅き事を習う人すら智人はかう候ぞかし、いかにかかるあ

さましき事

はありけるやらん、

かかる僻見の末へなれば彼の

びやっけん

でんぼういん ほんがん

伝法院の本願とがうする

しょうかくぼう

聖覚房が舍利講の式に云く「

尊高なる

いは

者は不二摩訶衍の仏なり驢牛の三身は車を扶くこと能はず秘奥

まかえん

ろご

さんじん

たす

あた

なる者は両部漫陀羅の教なり顕乗の四法は履を採るに堪へず」と

くつ

うんぬん

云云、

顕乗の四法と申すは法相・三論・華嚴・法華の四人、驢牛

もう

ほんそう

さんろん

けこん

ほっけ

ろご

の三身と申すは法華・華嚴・般若・深密經の教主の四仏、此等

さんじん

もう

ほっけ

けこん

はんにや

じんみつ

きようしゆ

の四仏

これら

の仏僧は真言師に対すれば聖覚弘法の牛飼・履物取者にもたら

しんごんし

しょうかくこうぼう

ぬ程の事なりとかいて候、彼の月氏の大慢婆羅門は生知の博学

がっし

だいまんばらもん

顕密二道胸にうかべ内外の典籍・掌ににぎる、されば王臣頭

けんみつにどう

ないげ

てんじやく

たなごころ

おうしんこうへ

をかたづけ万人師範と仰ぐあまりの慢心に世間に尊崇する者は大
自在天・婆藪天・那羅延天・大覺世尊此の四聖なり我が座の四足
にせんと座の足につくりて坐して法門を申しけり、当時の真言師
が釈迦仏等の一切の仏をかきあつめて灌頂する時敷まんだらと
するがごとし、禪宗の法師等が云く此の宗は仏の頂をふむ大法
なりというがごとし、而るを賢愛論師と申せし小僧あり彼をた
だすべきよし申せしかども王臣万民これをもちゐず、結句は大慢
が弟子等・檀那等に申しつけて無量の妄語をかまへて悪口打擲
せしかども・すこしも命もをしまずののしりしかば帝王・賢愛を
にくみてつめさせんとし給いしほどにかへりて大慢がせめられた
りしかば、大王・天に仰ぎ地に伏してなげひての給はく朕はまの

あたり此の事をきひて邪見じゃけんをはらしぬ先王はいかに此の者にたば
らされて阿鼻地獄あびじごくにをはすらんと賢愛論師けんあいろんしの御足にとりつきて悲
涙なみださせ給たまいしかば、賢愛けんあいの御計おんはからいとして大慢だいまんを驢うまにのせて五竺
に面おもてをさらし給たまいければいよいよ悪心盛あくしんになりて現身げんしんに無間
地獄じごくに墮おちぬ、今の世の真言しんごんと禅宗ぜんしゅう等とは此これにかわれりや、
漢土かんとの三階ざん禅師いわの云きようしゆしやくそんく教主ほけきよう釈尊だいいちの法華經しやうぞうは第一第二階の正像
の法門ほうもんなり末代まつだいのためには我がつくれる普經ふきようなり法華經ほけきようを今の世
に行じつほうぜん者は十方の大阿鼻獄あびごくに墮おつべし、末代まつだいの根機こんきにあたらざ
るゆへなりと申もうして、六時の礼懺らいさん・四時の坐禅ざぜん・生身しやうしん仏のごと
くなりしかば、人多く尊でしみて弟子万余人ありしかどもわづかの小
女の法華經ほけきようをよみしに・せめられて当坐こえには音を失うしない後には大蛇だいじや

だんなでしなら

になりてそこばくの檀那弟子並びに小女処女等をのみ食いしなり、今の善導・法然等が千中無一の悪義もこれにて候なり、此等

だいじ

の三大事は・すでに久くなり候へばいやしむべきにはあらねども

もう

せんまん

申さば信ずる人もやありなん、これよりも百千万億倍・信じがた

き最大の悪事はんべり、慈覚大師は伝教大師の第三の御弟子な

おんでし

り・しかれども上一人より下万民にいたるまで伝教大師には

かみいちにん

ばんみん

でんぎようだいし

勝れてをはします人なりとをもひり、此の人真言宗と法華宗の

すぐ

しんごんしゅう

ほっけしゅう

実義を極めさせ給いて候が真言は法華経には勝れたりとかかせ給

じつぎ

きわ

たま

しんごん

ほけきよう

すぐ

たま

へり、而るを叡山三千人の大衆・日本一州の学者等・一同の帰伏

しか

えいざんさんぜん

たいしゅう

にほん

きふく

の義なり、弘法の門人等は大師の法華経を華嚴経に劣るとかかせ

こうほう

もんじん

だいし

ほけきよう

けこんきよう

給えるは、我がかたながらも少し強きやうなれども、慈覚大師の

たま

じかくだいし

給えるは、我がかたながらも少し強きやうなれども、慈覚大師の

- 69 -

釈をもつてをもつに真言宗しんごんしゅうの法華經ほけきょうに勝れたることは一定なり、

にほんこく

しんごんしゅう

ほけきょう

まさ

えいざん

日本国にして真言宗を法華經に勝ると立つるをば叡山こそ強

さんぜん

きかたきなりぬべかりつるに慈覺をもつて三千人の口をふさぎな

しんごんしゅう

とうじだいいち

じかくだいし

ば真言宗はをもつごとし、されば東寺第一のかたうど慈覺大師

じょうどしゅう

ぜんしゅう

にはすべからず、例せば浄土宗・禅宗は余国にてはひろまる

にほんこく

えんりやくじ

むへん

とも日本国にしては延暦寺のゆるされなからんには無辺劫はふと

かな

あねんわじょう

もう

えいざんだいいち

じようろん

も叶うまじかりしを安然和尚と申す叡山第一の古徳・教時諍論

もう

しやうれつ

だいいちしんごんしゅう

と申す文に九宗の勝劣を立てられたるに第一真言宗・第二

ぜんしゅう

てんだいほつしゅう

けごんしゅう

うんぬん

みよつしやく

禅宗・第三天台法華宗・第四華嚴宗等云云、此の大謬 釈につ

ぜんしゅう

にほんこく

じゅうまん

ほうこく

ひて禅宗は日本国に充満して・すでに亡国とならんとはするな

ほうねん

ねんぶつしゅう

いんねん

えしん

り法然が念仏宗のはやりて一国を失わんとする因縁は慧心の

おうじょうようしゅう

往生要集の序よりはじまれり、師子の身の中の虫の師子を食う
と仏の記し給うはまことなるかなや。

でんぎようだいし

にほんこく

伝教大師は日本国にして十五年が間・天台・真言等を自見せ

たま

みょうじ

させ給う生知の妙悟にて師なくしてさとらせ給いしかども、世間

ふしん

かんど

わた

てんだい

しんごん

の不審をはらさんがために漢土に亘りて天台・真言の二宗を伝へ

たま

かんど

ひとびと

給いし時漢土の人人はやうやうの義ありしかども我が心には法華

しんごん

しんごんしゅう

みょうじ

は真言にすぐれたりと・をばしめししゆへに真言宗の宗の名字

たま

てんだいしゅう

しかん

しんごん

しんごん

たま

をば削らせ給いて天台宗の止観・真言等かかせ給う、十二年の

たま

てんだいしゅう

しかん

しんごん

しんごん

たま

年分得度の者二人を・をかせ給い、重ねて止観院に法華経・

こんこうみょうきよう

にんのうきよう

ちんごこつか

せんじ

金光明経・仁王経の三部を鎮護国家の三部と定めて宣旨を

もう

くだ

にほんこく

だいいち

しんじ

しんじ

宝剣

ないじどころ

申し下し永代日本国の第一の重宝・神璽・宝剣・内侍所とあがめ

させ給^{たま}いき、叡^{えい}山第一^{ざん}の座主^{ざす}・義真和尚^{ぎしんわじょう}・第二^{だいに}の座主^{ざす}・円澄大師^{えんちようだいし}
までは此^この義相違^{そくい}なし、第三^{だいさん}の慈覚大師^{じかくだいし}・御入唐^{にゆうとう}・漢土^{かんど}にわた
りて十年^{じゅうねん}が間^{かん}・顯密二道^{けんみつにどう}の勝劣^{しょうれつ}を八箇^{はつこ}の大徳^{だいとく}にならひつたう、
又天台宗^{てんだいしゅう}の人人^{ひとびと}広修^{こうしゅう}・惟^{ゆい}・等^{けん}にならはせ給^{たま}いしかども心の内に
をばしけるは真言宗^{しんごんしゅう}は天台宗^{てんだいしゅう}には勝^{すぐ}れたりけり、我が師^し・
伝教大師^{でんぎようだいし}はいまだ此^この事をばくはしく習^{しゆ}せ給^{たま}わざりけり漢土^{かんど}に
久しくもわたらせ給^{たま}わざりける故^{ゆえ}に此^この法門^{ほうもん}はあらうち・をは
しけるやと・をばして日本国^{にほんこく}に帰朝^{きちよう}し叡^{えい}山東塔止観院^{しかん}の西^{にし}に
総持院^{そうじいん}と申^{もう}す大講堂^{だいこうどう}を立て御本尊^{ごほんぞん}は金剛界^{こんこうかい}の大日如来^{だいにちによらい}・此^この御前^{おんまえ}
にして大日經^{だいにちきよう}の善無畏^{ぜんむい}の疏^{じよ}を本^{ほん}として金剛頂經^{こんこうちようきよう}の疏^{じよ}七卷^{しちくわん}・
蘇悉地經^{そしつちきよう}の疏^{じよ}七卷^{しちくわん}・已上十四卷^{じよ}をつくる、此^この疏^{じよ}の肝心^{かんじん}の釈^{しやく}に

いわ

云く「教に二種有り一は顕示教謂く三乗教なり世俗と勝義と

いま えんゆう

未だ円融せざる故に、二は秘密教謂く一乗教なり世俗と勝義と

ゆう

ゆえ

ひみつ

また

せぞく

りひみつ

一体にして融する故に、秘密教の中に亦二種有り一には理秘密の

もろもろけこん

はんやゆいまほっけ

ねはん

せぞく

教諸の華嚴・般若維摩法華・涅槃等なり但だ世俗と勝義との不二

いま しんこん

ゆえ

じりぐみつ

を説いて未だ真言密印の事を説かざる故に、二には事理俱密教

おもえらだいにち

こんごうちょうきよう

そしつちきよう

またせぞく

またせぞく

謂く大日教・金剛頂経・蘇悉地経等なり亦世俗と勝義との不二

と またしんこん

ゆえ

うんぬん

しゃく

ほけきよう

しんこん

を説き亦真言密印の事を説く故に「等云云、釈の心は法華経と真言

しょうれつ

たま

しんこん

さんぶきよう

ほっけ

しよせん

の三部との勝劣を定めさせ給うに真言の三部経と法華とは所詮

いちねんさんぜん

ほうもん

しんこん

の理は同じく一念三千の法門なり、しかれども密印と真言等の事

ほけきよう

ほけきよう

りひみつ

しんこん

さんぶきよう

じり

法は法華経かけてをはず法華経は理秘密・真言の三部経は事理

ぐみつ

てんちうんてい

しか

かも此の筆は私の釈に

俱密なれば天地雲泥なりとかかれたり、

はあらず善無畏三蔵の大日經の疏の心なりと・をばせどもなを
なを二宗の勝劣不審にやありけん、はた又他人の疑いをさん
ぜんをやをばしけん、大師覺の伝に云く、大師二經の疏を造り功を
成し已畢つて心中独り謂らく此の疏仏意に通ずるや否や若し
仏意に通ぜざれば世に流伝せじ仍つて佛像の前に安置し七日七夜
深誠を翹企し祈請を勤修す五日の五更に至つて夢らく正午に当
つて日輪を仰ぎ見弓を以て之を射る其の箭日輪に當つて日輪即轉
動す夢覺めての後深く仏意に通達せりと悟り後世に伝うべし」等
云云、慈覺大師は本朝にしては伝教・弘法の兩家を習いきわめ
異朝にしては八大德並に南天の宝月三蔵等に十年が間最大事の
秘法をきわめさせ給える上二經の疏をつくり了り重ねて本尊に

きしよう
祈請をなすに智慧の矢すでに中道の日輪にあたりてうちをどろ
かせ給い、歡喜のあまりに仁明天王に宣旨を申しそへさせ給い
てんたい ざす しんこん かんしゅ
天台の座主を真言の官主となし真言の鎮護国家の三部とて今に四
百余年が間・碩学稲麻のごとし渴仰竹葦に同じ、されば桓武・
でんぎよう にほんこくこんりゆう じとう
伝教等の日本国建立の寺塔は一字もなく真言の寺となりぬ公家
も武家も一同に真言師を召して師匠とあをぎ官をなし寺をあづけ
たま ぶつじ もくえ かいげん くよう はつしゅう だいにちぶつげん しんこん
給ふ、仏事の木画の開眼供養は八宗一同に大日仏眼の印・真言
なり。

うたがい
疑つて云く法華經を真言に勝ると申す人は此の釈をばいかが
せん用うべきか又すつべきか、答う仏の未来を定めて云く「法に
依つて人に依らざれ」竜樹菩薩の云く「修多羅に依れるは白論
よ よ りゅうじゅぼさつ いわ しゆたら びやくろん

なり修多羅しゆたらに依よらざれば黒論くろろんなり」天台てんだいの云いわく「復修多羅またしゆたらと合せば録ろくして之これを用もちゆ文ぶん無なくく義ぎ無なきは信受しんじゆすべからず」伝でん教大師ぎやうだいし云いわく「ぶつせつえびよう 仏説ぶつせつに依憑えびようして口伝くでんを信ずること莫なれ」等云云うんぬん、此等これらの經論きやうろん釈しやくのごときんば夢もとを本もとにはすべからずただついさして法華經ほけきやうと大日經だいにちきやうとの勝劣しょうれつを分明ふんみやうに説きたらん經論きやうろんの文こそたいせちに候こはめ、但ただし印しんこん・真言しんこんなくば木画もくえの像かいげんの開眼かいげんの事こと・此れ又こをこの事しんこんなり真言しんこんのなかりし已前いぜんには木画もくえの像かいげんの開眼かいげんはなかりしか、天竺てんじく・漢土かんど・日本にほんには真言宗しんこんしゆう已前いぜんの木画もくえの像かいげんは・或あるは行き・或あるは説法せつぽうし・或あるは御物語おんものがたりあり、印しんこん・真言しんこんをもて仏くやうを供養くやうせしより・このかた利生りしやうもかたがた失うせたるなり、此これは常じやうだんの論談ろんだんの義なり、此の一事いじにをひては但ただし日蓮にちれんは分明ふんみやうの証拠しやうこを余所よそに引くべからず

じかくだいし
慈覚大師の御釈を仰いあおで信じて候なり。

問うて云く何いかにと信ぜらるるや、答えて云く此の夢の根源こんげんは

真言しんこんは法華經ほけきょうに勝ると造まさ定めての御ゆめなり、此の夢吉夢なら

ば慈覚大師の合せさせ給たまうがごとく真言勝るべし、但日輪しんこんまさを射るにちりん

とゆめにみたるは吉夢なりといふべきか、内典ないてん五千・七千余卷

外典三千余卷の中に日を射るとゆめに見て吉夢なる証拠しよこをうけ給たま

わるべし、少少こ此れより出し申さん阿闍世王あじゃせは天より月落るとゆ

めにみて耆婆ぎば大臣に合せさせ給たましかば大臣合せて云く仏の御

入滅にゅうめつなり須拔多羅天より日落るとゆめにみる我とあわせて云く

仏の御入滅にゅうめつなり、修羅しゆらは帝釈たいしゃくと合戦の時まづ日月をいたてまつ

る、夏の桀かのけつ・殷いんのちゆうの紂あくおつと申せし悪王は常に日をいて身をほろぼし国

をやぶる、まやふじん摩耶夫人は日をはらむとゆめにみてしつたたいし悉達太子をうませ

給う、たまかるがゆへに仏のわらわなをば日種にほんこくという、日本国と申す

てんしょうだいじん

は天照太神の日天にてましますゆへなり、されば此のゆめは

てんしょうだいじんでんぎようだいし

天照太神・伝教大師・釈迦仏・法華經をいたてまつれる矢にて

じよ

こそ二部の疏は候なれ、日蓮は愚癡の者なればきようろん經論もしらず但

ほけきよう

しんこん

もつ

こんじよう

此の夢をもつて法華經に真言すぐれたりと申す人は今生には国

うしないごしよう

じふく

をほろぼし家を失ひ後生にはあび地獄に入るべしとはしりて候、

げんしろう

にほんこく

もうこ

いっさい

しんこんし

じようぶく

今現証あるべし日本国と蒙古との合戦に一切の真言師の調伏を

にほん

しんこん

行ひ候へば日本かちて候ならば真言はいみじかりけりと・おもひ

ただ じようきゆう

候なん、但し承久の合戦にそこばくの真言師のいのり候しが

じようぶく

たま

たゆうどの

たま

ごとばいん

おき

調伏せられ給し権の大夫殿はかたせ給い、後鳥羽院はおき隠岐の国

へ御子の天子は佐渡の嶋嶋へ調伏しやりまいらせ候いぬ、結句

は野干のなきの身にをうなるやうに還著於本人の経文にすこし

もたがはず叡山の三千人かまくらに・せめられて一同にしたがい

はてぬ、しかるに今はかまくらの世さかななるゆへに東寺・天台

・園城・七寺の真言師等と並びに自立をわすれたる法華宗の

謗法の人人・関東にをちくだりて頭をかたぶけひざをかがめや

うやうに武士の心をとりて、諸寺・諸山の別当となり長吏となり

て王位を失いし悪法をとりいだして国土安穩といのれば、將軍

家並びに所従の侍已下は国土の安穩なるべき事なんめりとうち

をもひて有るほどに法華經を失う大禍の僧どもを用いらるれば国

定めてほろびなん、亡国のかなしさ亡身のなげかしさに身命を

すてて此の事をあらわすべし、国主世を持つべきならばあやしと

・おもひてたづぬべきところにたださんげんのことばのみ用いて

やうやうのあだをなす、而るに法華經守護の梵天・帝釈・日月

・四天地神等は古の謗法をば不思議とはをばせども此れをしれる

人なければ一子の悪事のごとくうちゆるして、いつわりをろかな

る時もあり又すこしつみしらする時もあり、今は謗法を用いたる

だに不思議なるにまれまれ諫曉する人をかへりてあだをなす、

一日・二日・一月・二月・一年・二年ならず数年に及ぶ、彼の

不輕菩薩の杖木の難に値いしにも・すぐれ覺徳比丘の殺害に

及びしにもこえたり、而る間・梵釈の二王・日月・四天・衆星

・地神等やうやうにいかり度度いさめらるれども・いよいよあだ

をなすゆへに天の御計いとして隣国の聖人にをほせつけられて

こ

きじん

此れをいましめ大鬼神を国に入れて人の心をたばらかし自界

はんぎやく

きつきよう

きんじ

なん

叛逆せしむ、吉凶につけて瑞大なれば難多かるべきことわり

ぶつめつ

にて仏滅後・二千二百三十余年

が間いまだいでざる大長星いまだふらざる大地しん出来せり、

かんど にほん

ちえ

さいのう

しようにん

たびたび

漢土・日本に智慧すぐれ才能いみじき聖人は度度ありしかども

にちれん

ほけきよう

こくど

ごうてき

いまだ日蓮ほど法華経のかたうどとして国土に強敵多くまうけたる

がんぜん

にちれん

えんぶだい だいいち

者なきなり、まづ眼前の事をもつて日蓮は閻浮提第一の者とする

ぶつぼう

にほん

いっさいきよう

べし、仏法・日本にわたて七百余年一切経は五千・七千宗は

はっしゅう

ちじん

とうま

ぐつう

ちくい

八宗・十宗智人は稲麻のごとし弘通は竹葦にいたり、しかれど

あみだぶつしよぶつ

みょうごう

みだ

みょうごう

も仏には阿弥陀仏諸仏の名号には弥陀の名号ほどひろまりてを

はするは候はず、此の名号を弘通する人は慧心は往生要集を
つくる日本国三分が一は一同の弥陀念仏者・永観は十因と往生
講の式をつくる扶桑三分が二分は一同の念仏者法然せんちやくを
つくる本朝一同の念仏者、而れば今の弥陀の名号を唱うる人人
は一人が弟子にはあらず、此の念仏と申すは雙観經・觀經・
阿弥陀經の題名なり 権大乘經の題目の広宣流布するは
実大乘經の題目の流布せんずる序にあらずや、心あらん人は
此れをすひしぬべし、権經流布せば実經流布すべし 権經の
題目流布せば実經の題目も又流布すべし、欽明より当帝にいた
るまで七百余年いまだきかずいまだ見ず南無妙法蓮華經と唱え
よと他人をすすめ我と唱えたる智人なし、日出でぬれば星かくる

けんおう

ぐおう

じつきやうるふ

ごんきやう

ちじんなむ

賢王来れば愚王ほろぶ実経流布せば権経のとどまり智人南無

みようほうれんげきやう

とな

ぐにんこ

したが

ひびき

妙法蓮華経と唱えば愚人の此れに随はんこと影と身と声と響と

のごとくならん、

にちれん

にほんだいいち

ほけきやう

ぎやうじゃ

行者なる事あえて

うたがい

疑ひなし、これをもつてすいせよ漢土月支にも一閻浮提の内に

かんどがっし

えんぶだい

も肩をならぶる者は有るべからず。

あ

問うて云く

いわしやうか

だいち

ぶんえい

すいせい

大彗星はいかなる事によつて

しゅつたい

出来せるや答えて云く天台云く「智人は起を知り蛇は自ら蛇を

いわてんだいいわ

ちじん

じゃ

みずかじゃ

識る」等云云、問て云く心いかん、答えて云く上行菩薩の大地

しうんぬん

いわ

いわじやうぎやうぼさつ

だいち

より出現し給いたりしをば弥勒菩薩・文殊師利菩薩觀世音菩薩

しゅつげん

たま

みろくぼさつ

もんじゆしりぼさつかんぜおんぼさつ

やくおうぼさつ

薬王菩薩等の四十一品の無明を断ぜし人人も元品の無明を断ぜざ

むみやう

だん

ひとびと

がんぼん

むみやう

だん

れば愚人といはれて寿量品の南無妙法蓮華経の末法に流布せん

ぐにん

じゆりやうぼん

な

むみようほうれんげきやう

まつぼう

るふ

ずるゆへに、此の菩薩を召し出されたるとはしらざりしという事
なり、問うて云く日本・漢土月支の中に此の事を知る人あるべし
や、答えて云く見思を断尽し四十一品の無明を尽せる大菩薩だに
も此の事をしらせ給はずいかにいわうや一毫の惑をも断ぜぬ者ど
もの此の事を知るべきか、問うて云く智人なくば・いかでか此れ
を対治すべき例せば病の所起を知らぬ人の病人を治すれば人必ず
死す、此の災の根源を知らぬ人人がいのりをなさば国まさに亡び
ん事疑いなきか、あらあさましやあらあさましや、答えて云く蛇
は七日が内の大雨をしり鳥は年中の吉凶をしる此れ則ち大竜の
所従又久学のゆへか、日蓮は凡夫なり、此の事をしるべからず
といえども汝等にはばこれをさとさん、彼の周の平王の時・禿に

して裸なる者出現せしを辛有といぬし者うらなつて云く百年が
内に世ほろびん同じき幽王の時山川くづれ大地ふるひき白陽と云
う者勸えていはく十二年の内に大王事に値せ給うべし、今の
大地震大長星等は国王・日蓮をにくみて亡国の法たる禅宗と
念仏者と真言師をかたふどせらるれば天いからせ給いていださせ
給うところの災難なり。

問うて云くなにをもつてか此れを信ぜん、答えて云く
最勝王経に云く「悪人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に
星宿及び風雨皆時を以て行われず」等云云、此の経文のごとき
んば此国に悪人のあるを王臣此れを帰依すという事疑いなし、
又此の国に智人あり国主此れをにくみてあだすという事も又疑

いなし、又云く「三十三天の衆咸忿怒の心を生じ変怪流星墮ち二
の日俱時に出で他方の怨賊来りて国人喪乱に遭わん」等云云、す
でに此の国に天変あり地天あり他国より此れをせむ三十三天の御
いかり有こと又疑いなきか、仁王經に云く「諸の悪比丘多く
名利を求め国王・太子・王子の前に於て自ら破仏法の因縁・破国
の因縁を説く其王別ずして信じて此語を聴く」等云云、又云く
「日月度を失い時節反逆し・或は赤日出で・或は黒日出で二三
四五の日出で・或は日蝕して光無く・或は日輪一重二重四
五重輪現ず」等云云、文の心は悪比丘等・国に充滿して国王・
太子・王子等をたばらかして破仏法・破国の因縁をとかは其の国
の王等・此の人いたばらかされてをばすやう、此の法こそ持仏法

の因縁持国の因縁とをもひ此の言を・をさめてをこなうならば

にちがつ

たいふう

だいう

たいか

しゅったい

ぞく

もう

日月に変あり大風と大雨と大火等出来し次には内賊と申して

しんるい

ひょうらん

親類より・大兵乱おこり我がかたうとしぬべき者をば皆打ち

うしな

たこく

失いて後には他国に・せめられて・或は自殺し・或はいけどりに

ある

ある

ある

せられて・或は降人となるべし是れ偏に仏法をほろぼし国をほろ

ぼす故なり、守護経に云く「彼の釈迦牟尼如来所有の教法は一切

い

ひとえ

ぶつぼう

きようほう

いっさい

の天魔・外道悪人五通の神仙皆乃至少分をも破壊せず而るに此の

てんま

げどうあくにん

みなないし

はえ

しか

名相の諸の悪沙門皆悉く毀滅して余り有ること無からしむ

みようそう

もろもろ

しゃもん

みなことごと

きめつ

あ

須弥山を仮使三千界の中の草木を尽して薪と為し長時に焚焼す

しゅみせん

たといさんぜんかい

そうもく

たきぎ

な

ほんしょう

とも一毫も損すること無し若し劫火起りて火内従り生じ須臾も

しょうめつ

かいじん

も

ごうか

うちよ

しゅゆ

焼滅せんには灰燼をも余す無きが如し」等云云、蓮華面経に云く

しょうめつ

かいじん

ごと

うんぬん

れんげめんきよう

いわ

「仏阿難に告わく譬えば師子の命終せんに若しは空若しは地
若しは水若しは陸所有の衆生敢て師子の身の穴を食わず唯師子
自ら諸の虫を生じて自ら師子の穴を食うが如し阿難我が之の仏法
は余の能く壞るに非ず是れ我法の中の諸の悪比丘我が三大
阿僧祇劫積行勤苦し集むる所の仏法を破らん」等云云、經文の
心は過去の迦葉仏釈迦如来の末法の事を訖哩枳王にかたらせ給い
釈迦如来の仏法をばいかなるものがうしなうべき、大族王の五天
の堂舎を焼き払い十六大国の僧尼を殺せし漢土の武宗皇帝の九国
の寺塔四千六百余所を消滅せしめ僧尼二十六万五百人を還俗せ
し等のごとくなる悪人等は釈迦の仏法をば失うべからず、三衣を
身にまとひ一鉢を頸にかけ八万法蔵を胸にうかべ十二部經を口に

そうりよ

ぶつぼう

うしな

たと

しゅみせん

ずうせん僧侶が彼の仏法を失うべし、譬へば須弥山は金の山なり

さんぜんだいせんせかい

そうもく

してん

じゅうまん

三千大千世界の草木をもつて四天六欲に充滿してつみこめて一

せんまん

いちぶん

年・二年百千万億年が間やくとも一分も損ずべからず、而るを

こうか

しゅみ

ばか

しゅみせん

劫火をこらん時須弥の根より豆計りの火いでて須弥山をやくのみ

さんぜんだいせんせかい

うしな

もぶつき

ならず三千大千世界をやき失うべし、若し仏記のごとくならば十

はっしゅう

ないてん

ぶつきよう

しゅみせん

宗・八宗・内典の僧等が仏教の須弥山をば焼き払うべきにや、

しょうじよう

ぐしゃ

じようじつ

りつそう

だいじよう

しんに

小乗の俱舎・成実・律僧等が大乘をそねむ胸の瞋恚は炎なり

しんこん

ぜんむいぜんしゅう

じようとしゅう

ぜんどう

ぶつきよう

しし

真言の善無畏・禅宗の三階等・浄土宗の善導等は・仏教の師子の肉

しゅつたい

いなむし

びく

でんぎようだいし

さんろん

ほつそう

けこん

より出来せる蝗虫の比丘なり、伝教大師は三論・法相・蔵等

にほん

せきとく

にちれん

しんこん

ぜんしゅう

じようど

の日本の碩徳等を六虫とかかせ給へり、日蓮は真言・禅宗・浄土

がんそ

てんだいしゅう

じかく

あんねん

えしん

等の元祖を三虫となづく、又天台宗の慈覚・安然・慧心等は

ほけきょうでんぎょうだいし
法華經伝 教大師の師子の身の中の三虫なり。

これら ほうほう こんげん にちれん

此等の大謗法の根源をただす日蓮にあだをなせば天神をしみ

ちぎ さま おおい おこ

地祇もいからせ給いて災天も大に起るなり、されば心うべし一

えんぶだいだいいち だいじ もう さいだいいち ずいそうこ

閻浮提第一の大事を申すゆへに最第一の瑞相此れをこれり、あわ

にほんこく みなむげん だいじょう

れなるかなや・なげかしきかなや日本国の人皆無間・大城に

お 堕ちむ事よ、悦しきかなや・楽かなや不肖の身として今度心田

ぶっしゅ たのしい ふしょう このたび

に仏種をうえたる、いまにしもみよ大蒙古国・数万艘の兵船をう

にほん かみいちにん ばんみん

かべて日本をせめば上一人より下万民にいたるまで一切の仏寺

いっさい 連合 なむみょうほうれんげきょう

一切の神寺をばなげすてて各各声をつるべて南無妙法蓮華經・

なむみょうほうれんげきょう とな たなごころ たま にちれん ごほう

南無妙法蓮華經と唱え 掌 を合せてたすけ給え、日蓮の御房

にちれん ごほう そうち がっし だいぞくおう

日蓮の御房とさけび候はんずるにや、例せば月支のいう大族王は

幻日王に 掌 たなこころ をあはせ日本 にほん の宗盛 むねもり はかぢわらをうやまう、大慢 だいまん

のものは敵 した に随うという・このことわりなり、彼の輕毀大慢 きようきだいまん の

比丘等 びく は始めには杖木 じょうもく をととのへて不輕菩薩 ふぎようぼさつ を打ちしかども後

には 掌 たなこころ をあはせて失 とが をくゆ提婆達多 だいばだつた は釈尊 しゃくそん の御身 おんみ に血をいだ

ししかども臨終 りんじゅう の時には南無 なむ と唱 とな へたりき、仏 ぶつ とだに申 もう したり

しかば地獄 じごく には墮 お つべからざりしを業 な ふかくして但南無 なむ とのみと

なへて仏 にほんこく とはいはず、今・日本国 こうそう の高僧等 なむにちれんしようにん も南無日蓮聖人 なむにちれんしようにん とと

なえんとすとも南無計 なむばか りにてやあらんずらんふびんふびん。

外典 げてん に曰 いわ く未萌 みぼう をしるを聖人 しようにん という内典 ないてん に云 いわ く三世 さんぜ を知るを

聖人 しようにん という余 りつしょうあんこころん に三度 さいみょうじ のかうみようあり一 いた には去 ぶんおう し文応元年 がんねん 庚申 たうしん

七月十六日 しちがつじゅうろくにち に立正安国論 りつしょうあんこころん を最明寺殿 さいみょうじ に奏 そう したてまつりし時宿谷 やどや

の入道にゆうどうに向つて云くいわ禅宗ぜんしゅうと念仏宗ねんぶつしゅうとを失うしない給たまうべしと申もうさせ給たまへ此この事を御用もちいなきならば此この一門いちもんより事をこりて他国たこくに・せめられさせ給たまうべし、二には去いたし文永八年九月十二日申さるの時に
平左衛門尉さえものじように向つて云くいわ日蓮にちれんは日本国にほんこくの棟梁とうりようなり予を失うしななうは
日本国にほんこくの柱はしらを倒たすなり、只今ただに自界じかい反逆ほんぎやく難なんとてどしうちして
他国たこく侵逼しんぷつ難なんとて此この国この人人ひとびと他国たこくに打ち殺ころさるのみならず多くい
けどりにせらるべし、建長寺けんちようじ・寿福寺じうふくじ・極楽寺ごくらくじ・大仏だいぶつ・長樂寺ちようらくじ等
の一切いっさいの念仏者ねんぶつ・禅僧等じんそうが寺塔じとうをばやきはらいて彼等かれらが頸くちをゆひ
のはまにて切きらずば日本国にほんこく必ずほろぶべしと申し候もう了あわぬ、第三に
は去年こぞ文永ぶんえい十一年四月八日左衛門尉さえものじように語かたつて云くいわ、
身みをば随つえられたてまつるやうなりとも心をば随つえられたてまつ

るべからず念仏ねんぶつの無間獄むげんごく禪ぜんの天魔てんまの所為しよゐなる事は疑うたがひいなし、

殊ことに真言宗しんこんしゅうが此この国土こくどの大なるわざはひにては候なり

大蒙古もうこを

調じょうぶく伏ふくせん事真言師しんこんしには仰おおせ付けらるべからず若もし大事だいじを真言師しんこんし

・調じょうぶく伏ふくするならばいよいよいそいで此の国ほろぶべしと申せし

かば頼綱あみ問いうて云いくいつごろよせ候べき、予い言わく経文きやうもんにはいつ

とはみへ候はねども天みけの御氣色しきいかりすくなからず・きうに見急へ

て候こんじやうよも今生こんじやうはすごし候はじと語かたりたりき、此の三つの大事だいじは

日蓮にちれんが申もうしたるにはあらず只偏ただひとえに釈迦しゃか如来にやらいの御神たましい・我身わがみに入り

かわせ給たまいけるにや我が身ながらも悦よろこび身にあまる法華經ほけきやうの

一念いちねん三千さんぜんと申もうす大事だいじの法門ほうもんはこれなり、經いに云いく所謂い諸法しよほう如是にや相さう

と申もうすは何事なにことぞ十如是じふこの始はじめの相如にや是ぜが第一だいの大事だいじにて候へば仏は

世にいでさせ給^{たま}う、智^{ちじん}人は起^{おこ}をしる蛇^{じや}みづから蛇^{じや}をしるとはこれなり、衆^{しゅう}流^{りゅう}あつまりて大海^{たいかい}となる微^み塵^{じん}つもりて須^{しゆ}弥^み山^{せん}となれり、
日蓮^{にちれん}が法華^{ほけ}經^{きやう}を信じ始め^{はじめ}しは日本^{にほん}国^{こく}には一^{いつ}・一^{みじん}微^み塵^{じん}のごとし、
法華^{ほけ}經^{きやう}を二人^{ふにん}・三人^{さんにん}・十人^{じゆにん}・百千万億^{せんまん}人^{にん}・唱^{とな}え伝^{でん}うるほどならば
妙^{みよ}覺^{がく}の須^{しゆ}弥^み山^{せん}ともなり大^ね涅槃^{はん}の大海^{たいかい}ともなるべし仏^{ぶつ}になる道^{だう}は
此^これよりほかに又^{また}もとむる事^{こと}なかれ。

問^{もん}うて云^{いわ}く第二^{ふんえい}の文永^{ぶんえい}八年九月十二日の御^ご勘^{かん}氣^きの時^{とき}はいかにと
して我^{われ}をそんなせば自^じ他^たのいくさ^軍をこ^{おこ}るべしとはし^しり給^{たま}うや、答^{こた}う
大^{だい}集^{しゅう}經^{きやう}五十^{ごじゅう}に云^{いわ}く、若^もし復^{また}諸^{もろ}の刹^{せつ}利^り国^{こく}王^{わう}諸^{もろ}の非^ひ法^{ぽう}を作^なし世^せ尊^{そん}の
声^{しょう}聞^{もん}の弟^{でい}子^しを悩^{のう}乱^{らん}し若^もしは以^{もつ}て毀^き罵^めし刀^{とう}杖^{じやう}をもて打^ち斫^{しやく}し及^{およ}び
衣^い鉢^{はつ}種^{しゅ}種^くの資^し具^ぐを奪^もい若^もしは他^たの給^{きゅう}施^せに留^る難^{なん}を作^なす者^{もの}有^あらば我^{われ}等^ら

彼をして自然に卒に他方の怨敵を起さしめ及び自界の国土にも亦
兵起り飢疫飢饉非時の風雨・鬭諍言訟譏謗せしめ、又其の王を
して久しからずして復当に己れが国を亡失せしむべし」等云云、
夫れ諸経に諸文多しといえども此の経文は身にあたり時にのぞ
んで殊に尊くをばうるゆへに・これをせんしいだす、此の経文
に我等とは梵王と帝釈と第六天の魔王と日月と四天等の三界の
一切の天竜等なり、此等の上主・仏前に詣して誓つて云く仏の
滅後・正法・像法・末代の中に正法を行ぜん者を邪法の比丘等
が国主にうつたへば王に近きもの王に心よせなる者・我が
たつとしをもう者のいうことなれば理不尽に是非を糾さず・彼
の智人をさんざんとはちにをよばせなんどせば、其の故ともなく

其の国ににわか卒に・大兵乱・出現ひょうらんし後には他国たこくに・せめらるべ
し其の国主そもうせ其の国もほろび滅なんずと説かれて候、いた痛ひと
かゆ痒きとはこれなり、予が身には今生こんじょうにはさせる失とがなし但国ただを
たす扶けんがため生国の恩を報ほうぜんと申せしを御用おんもちいながらんこ
そ本意ほいにあらざるに、あま刺さへ召めし出いだして法華經ほけきようの第五まきの巻を
懐かい中ちゆうせるをとりいだしてさんざんと呵責さいなみ、結句けっくはこ小う路ちを
わた渡したなんとせしかば申したりしなり、日月天にちがつに処たし給たまいながら
日蓮にちれんが大難だいにんにあ遭うを今度このたびかわらせ給たまはずば一つには日蓮にちれんが法華經ほけきよう
の行者ぎようじやならざるか忽たちまちに邪見たちまちじゃけんをあらた改むべし、若もし日蓮にちれん・法華經ほけきよう
の行者ぎようじやならば忽たちまちに国験にしるしを見せ給たまへ若もししからずば今もの
日月等にちがつは釈迦しゃか・多宝たほう・十方じつぱうの仏をたぶらかし奉たてまつる大妄語もうごの人な

り、だいは こおうざい 提婆が虚誑罪・くぎゃり 俱伽利が大妄語にも百千万億倍すぎさせ給へたま

もうじ

る大妄語の天なりと声をあげて申せしかば忽に出来せるたちまち しゅつたい

じかいほんぎやくなん

自界反逆難なり、されば国土こくどいたくみだれば我身わがみはいうにかひな

ほんぶ

き凡夫なれども御経を持ちまいらせ候分齊そうろうぶんざいは当世とうせには日本第一にほんだいいち

だいにん

の大人なりと申すなり。もう

いわ

問うて云く慢煩惱は七慢・九慢・八慢あり汝が大慢は仏教になんじ だいまん ぶつぎよう

だいまん

明すところの大慢にも百千万億倍すぐれたり、彼の徳光論師はろんし

みろくぼさつ

弥勒菩薩を礼せず・大慢婆羅門は四聖ししようを座とせり、大天は凡夫ほんぶに

あらかん

して阿羅漢とななる無垢論師が五天第一だいいちといふし、此等は皆阿鼻これら みなあび

お むげん

に堕ちぬ無間の罪人なり汝いかでか一閻浮提第一えんぶだい だいいちの智人となのちじん

じこく

れる地獄に堕ちざるべしやおそろしおそろし、答えて云く汝はいわ なんじ

七慢・九慢・八慢等をばしれりや大覺世尊は三界第一となのらせ

給う一切の外道が云く只今天に罰せらるべし大地われて入りなん

と、日本国の七寺・三百余人が云く最澄法師は大天が蘇生か鉄

腹が再誕か等云云、而りといえども天も罰せずかへて左右を守護

し地もわれず金剛のごとし、伝教大師は叡山を立て一切衆生の

眼目となる結句七大寺は落ちて弟子となり諸国は檀那となる、さ

れば現に勝れたるを勝れたりという事は慢ににて大功徳なりける

か、伝教大師云く「天台法華宗の諸宗に勝れたるは所依の經に

拠るが故に自讃毀他ならず」等云云法華經第七に云く「衆山の

中に須弥山これ第一なり此の法華經も亦復かくの如し諸經の中

に於て最もこれ其の上なり」等云云、此の經文は已説の華嚴・

はんにや だいにちきよう こんせつ むりようぎきよう とうせつ ねはんぎきよう

般若・大日経等、今説の無量義経、当説の涅槃経等の五千・七

がっしりゆうぐう しおう とうりてんにちがつ いつさいききよう じっぽう

千月支竜宮・四王・天・利天日月の中の一一切経尽十方界の

しききよう てつちせん てつちせん にほんこく

諸経は土山・黒山・小鉄圀山・大鉄圀山のごとし日本国にわた

らせ給える法華経は須弥山のごとし。

たま ほけききよう しゅみせん またまたかく

又云く「能く是の經典を受持すること有らん者も、亦復是く

いわ よこ ききようてん じゅじ またまたかく

の如し、一切衆生の中に於て亦これ第一なり」等云云、此の経文

こと いつさいしゅじきよう おい また だいいち うんぬん ききようもん

をもつて案ずるに華嚴経を持てる普賢菩薩・解脱月菩薩等・

りゆうじゆ ぼさつ めみききよう ぼさつ ほうぞう だいし せいりきよう そくてん こつこつ しんじきよう

竜樹菩薩・馬鳴菩薩・法蔵大師・清涼国師・則天皇后・審祥

だいとく りきようべん そつじきよう しききよう むてんのう じんみつ はん にやききよう たま しききよう

大徳・良弁・僧正・聖武天皇・深密・般若経を持てる勝義生

ぼさつ しゅぼだい そんじや かじききよう だいし げんじききよう さんぞう たいききよう こうききよう かんろく

菩薩・須菩提尊者・嘉祥大師・玄奘三蔵・太宗・高宗・觀勒・

てんのう しんこんしききよう だいにちききよう たま こんこう さつた りききよう もうぼさつ

道昭・孝徳天皇、真言宗の大日経を持てる金剛薩・・竜猛菩薩

・竜智菩薩・印生王・善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵・
げんそう けいか こうぼうだいし じかくだいし ねはんぎよう たも かしょう
玄宗・代宗・慧果・弘法大師・慈覚大師、涅槃經を持てる迦葉
どうじぼさつ にるい どんむさんさんぞう こうたく ほつうん なんざん ほくひち
童子菩薩・五十二類・曇無讖三蔵、光宅寺の法雲南三・北七の十
師等よりも末代悪世の凡夫の一戒も持たず一闡提のごとくに人に
まつだいあくせ ほんぶ いっかい いっせんだい
は思はれたれども、經文のごとく已今当にすぐれて法華經より
きようもん まさ
外は仏になる道なしと強盛に信じて而も一分の解なからん人人
けられ たいせい せんまん とう ひとつと
は、彼等の大聖には百千万億倍のまさりなりと申す經文なり、
ひとつと
彼の人人は・或は彼の經經に且く人を入れて法華經へうつさん
ひとつと ある きようぎよう しばら ほけきよう
がためなる人もあり、・或は彼の經に著をなして法華經へ入らぬ
ある きようぎよう とどまる ほけきよう
人もあり、・或は彼の經經に留逗のみならず彼の經經を深く
ほけきよう きようぎよう
執するゆへに法華經を彼の經に劣るといふ人もあり、されば今
しゅつ ほけきよう

ほけきよう ぎようじや

法華經の行者は心うべし、たと譬えば「いっさい一切の川流江河の諸水の中

だいいち

に海これ第一なるが如く法華經を持つ者も亦復是くの如し、又

しゅうせい

がつてんし

だいいち

ごと

ほけきよう

衆星の中に月天子最もこれ第一なるが如く法華經を持つ者も

またまたかく

ごと

とうせ

にほんこく

ちじん

亦復是くの如し」等と御心えあるべし、当世・日本国の智人等は

しゅうせい

にちれん

まんげつ

衆星のごとし日蓮は満月のごとし。

いわ

いにしえ

問うて云く古へかくのごとくいえる人ありや、答えて云く

でんぎようだいし

いわ

まさ

たしゅうしよえ

いま

さいい だいいち

伝教大師の云く「当に知るべし他宗所依の經は未だ最為第一な

そ

よ

またいま

だいいち

てんだいほつけしゅう

しよじ

らず其の能く經を持つ者も亦未だ第一ならず天台法華宗は所持の

さいい だいいち

ゆえ

よ

ほつけ

またしゅじよう

だいいち

經最為第一なるが故に能く法華を持つ者も亦衆生の中に第一な

すで

ぶつせつ

よ

あにじたん

そ

きりん

り、已に仏説に拠る豈自歎ならんや」等云云、夫れ麒麟の尾につ

きりん

よ

あにじたん

うんぬん

そ

きりん

しゅゆ

けるだにの一日に千里を飛ぶといふ、転王に随える劣夫の須臾に

せんり

てんおう

つか

れつぷ

しゅゆ

してんげ
四天下をめぐるといふをば難ずべしや疑うべしや、豈自歎哉
あたじたんならんや

の釈は肝にめいずるか若し爾らば法華經を經のごとくに持つ人は

ほんのう

梵王にも・すぐれ帝釈にもこえたり、修羅を随へば須弥山をも

たいしゃく

しゅら

しゅみせん

になひぬべし竜をせめつかはば大海をもくみほしぬべし、伝教

たいかい

でんぎよう

だいしいわ

大師云く「讚むる者は福を安明に積み誇る者は罪を無間に聞く」

ほ

あんみよう

そし

つみ

むげん

うんぬん

等云云、法華經に云く「經を讀誦し書持すること有らん者を見て

ほけきよう

いわ

どくじゆ

しよじ

きようせんぞうしつ

けつこん

いだ

ないしそ

みようじゅう

あびごく

輕賤憎嫉して結恨を懷かん乃至其の人命終して阿鼻獄に入ら

ん」等云云、教主釈尊の金言まことならば多宝仏の証明たが

うんぬん

きようしゆしやくそん

きんげん

たほうぶつ

しようみよう

ずば十方の諸仏の舌相一定ならば今・日本国の一切の衆生無間

じつぽう

しよぶつ

ぜつそういちじよう

にほんこく

いっさい

しゅじようむげん

地獄に堕ちん事疑うべしや、法華經の八の卷に云く「若し後の

お

うたがい

うべしや、

ほけきよう

ほけきようの八の卷に云く

いわ

も

世に於て是の經典を受持し讀誦せん者は乃至諸願虚しからず、

おい

きようてん

じゆじ

どくじゆ

ないししよ

むな

またげんせ おい そ

亦現世に於て其の福報を得ん」又云く「若し之を供養し讚歎する

と有らん者は当に今世に於て現の果報を得べし」等云云、此の

二つの文の中に亦於現世・得其福報の八字・

まさにこんぜにおいてげんのかほうをえん
当於今世・得現果報の八字・已上一六字の文むなしくして日蓮

こんじょう

かほう

によらい

きんげん

だいば

そらごと

にちれん

今生に大果報なくば如来の金言は提婆が虚言に同じく多宝の

しょうみよう

くぎやり

もうこ

ほうぼう

いっさいしゅじょう

あびじこく

証明は俱伽利が妄語に異ならじ、

ほうぼう

一切衆生も阿鼻地獄

あびじこく

に墮つべからず、三世の諸仏もましまさざるか、されば我が弟子

さんぜ

しよぶつ

でし

等心みに法華經のごとく身命もおしままず修行して此の度仏法を

ほけきよう

しんみよう

しゅぎよう

ぶつぼう

心みよ、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

なむみようほうれんげきよう

なむみようほうれんげきよう

なむみようほうれんげきよう

なむみようほうれんげきよう

なむみようほうれんげきよう

なむみようほうれんげきよう

なむみようほうれんげきよう

なむみようほうれんげきよう

なむみようほうれんげきよう

抑此の法華經の文に「我身命を愛せず但無上道を惜しむ」

ほけきよう

しんみよう

むじょうどう

おし

涅槃經に云く「譬えば王使の善能談論して方便に巧なる命を他国

いは

たと

よくだんろん

ほうべん

たくみ

めい

たこく

に奉るに寧ろ身命を喪うとも終に王所説の言教を匿さざるが
如し智者も亦爾なり凡夫中に於て身命を惜まずかならず大乘
方等如来の秘蔵一切衆生に皆仏性有りと宣説すべし」等云云、
いかやうな事のあるゆへに身命をすつるまでにてあるやらん
委細にうけ給わり候はん、答えて云く予が初心の時の存念は伝教
・弘法・慈覚・智証等の勅宣を給いて漢土にわたりし事の
我不愛身命にあたれるか、玄奘三蔵の漢土より月氏に入りしに
六生が間・身命をほろぼししこれ等か、雪山童子の半偈のため
に身をなげ、薬王菩薩の七万二千歳が間・臂をやきし事かなん
をもひしほどに経文のごときんば此等にはあらず、経文に
我不愛身命と申すは上に三類の敵人をあげて彼等がのりせめ

とうじょう

しんみょう

ねはんぎょう

ないそう

刀杖に及んで身命をつばうともみへたり、又涅槃經の文に寧喪

しんみょう

つぎしも

きょうもん

いわ

いつせんだい

らかん

身命等ととかれて候は次下の經文に云く「一闡提有り羅漢の像

な くうじょう

ほうとうきようてん

ひほう

もろもろほんぶ

おわ

みな

を作し空処に住し方等經典を誹謗す、諸の凡夫人見已つて皆真

あらかんこ

ぼさつ

い

うんぬん

ほけきよう

の阿羅漢是れ大菩薩なりと謂わん」等云云、彼の法華經の文に第

てきじん

いわ

あれんにや

のうえ

くうげん

あ

三の敵人を説いて云く「或は阿蘭若に納衣にして空閑に在つて

ないし

くぎよう

ろくつう

らかん

こと

うんぬん

乃至世に恭敬せらるること六通の羅漢の如き有らん」等云云、

はつないおんきよう

いわ

らかん

いつせんだい

あくぎよう

うんぬん

般泥洹經に云く「羅漢に似たる一闡提有つて惡業を行ず」等云云、

これら きょうもん

しょうほう じうてき

もう

あくおう

げどうまおう

此等の經文は正法の強敵と申すは惡王惡臣よりも外道魔王より

はい そうつりよ

じかいうち

ほうほう

も破戒の僧侶よりも、持戒有智の大僧の中に大謗法の人あるべし、

みょうらくだいし

書 いわ

第三最も

はなはだ

のちのち

うたたしり

されば妙樂大師かいて云く「第三最も甚し後後の者は轉識り

がた

もつ

うんぬん

ほけきよう

いわ

難きを以ての故なり」等云云、法華經の第五の卷に云く「此の

ほけきよう しよぶつによらい ひみつ
法華經は諸仏如来の秘密の蔵なり、諸經の中に於て最も其の上
に在り」等云云、此の經文に最在其上の四文あり、されば此
の經文のごときんば法華經を一切經の頂にありと申すが
ほけきよう ぎやうじや ほけきよう いっさいきよう いただき
法華經の行者にてはあるべきか、而るを又國王に尊重せらるる
ひとびと 数 多 ほけきよう 勝
人人あまたありて、法華經にまさりてをはする 經經 ましますと
もう 黄 そうじ ほけきよう
申す人にせめあひ候はん時、かの人は王臣に御歸依あり法華經の
ぎやうじや ひんどう
行者は貧道なるゆへに、国こそつてこれをいやしみ候はん時、
ふぎようばさつ けんあいろんし
不輕菩薩のごとく賢愛論師のごとく申しつをらば身命に及ぶべ
し、此れが第一の大事なるべしとみへて候此の事は今の日蓮が身
こ だいいち だいじ
にあたり、予が分齊として弘法大師・慈覺大師・善無畏三蔵・
ぶんざい こうぼうだいし じかくだいし ぜんむいさんぞう
こんこうちさんぞう ふくこうさんぞう ほけきよう こうてき きようもん
金剛智三蔵・不空三蔵などを法華經の強敵なり經文まことな

らば無間地獄は疑なしなんと申すは裸形にて大火に入るは

やすし須弥を手にとてなげんはやすし大石を負うて大海をわたら

んはやすし日本国にして此の法門を立てんは大事なるべし云云。

靈山浄土の教主 釈尊 宝浄世界の多宝仏・十方分身の諸仏・

地涌千界の菩薩等・梵釈・日月・四天等・冥に加し顕に助け給

はずば一時一日も安穩なるべしや。